夫德若五萬載稱君茂榮而在焉。尉殿三番叟祝我等千秋將侍。故鳴鼓之謠毎年之福大夫而振鈴之舞今日之御祈禱也。新玉の年始に探李少君之玉不可得。古銕店端に選日無借之錢不可入。裏白之紙屑籠隨拾隨滿。神馬之藻鹽草以書以集。皆忘串柿之本。盡遊擣栗之下。發口謳歌繁於五葉之松。湧臍笑語甚於大福之茶。蓋七百餘首爲卷十七。爲類十二。一日春。二日夏。三日秋。四日冬。五日離別。六日羇旅。七日哀傷。八日賀。九日戀。十日雜。十一日釋教。十二日神祇。板行已成卷數維新。虎狼漏殿之雨不濕寸紙。風吹勿吹之風不散一牧。長不乘柳原筵。幸免爲淺草紙。隨武藏野之末廣。遍於四里四方。因筑波山之御蔭。滿于八百八町。誠目出度候哉。萬載々々萬々載云爾。

時天明三年歳次癸卯

四方山人等序



ならの葉の名におふ宮の古ことならで、松のはのときはの蔭にさへづる萬歳をもて名とせるこそ、かゝるたのしき御代に腹をつゞみうつたはれをのともが、ちりうせぬ言の葉なりけれ。この卷のおくに、其ことわり書きてよとこはるゝを、ゆづる葉のゆづりなむもなかなかなればとて、橘のやちまたがのぶる事しかり。

萬載狂歌集 終



## 德和歌後萬載集序

さきにえらべる萬載狂歌集は、古きを拾ひ新しきを加へて、書いつけけるなり。そのふみ世にひろごりてのち、月にまし日にそひて、すき人多く出できにけり。烏がなくあづま歌、今やさかんに行はれなれりければ、むしろ織る翁も夷曲のさまをさぐり、犬うつわらべも此鄙ぶりをもとめて、芻蕘のものもよみ、雉兎のものもまねぶ。いつちくたつちく太左衞門どのの乙娘も、濱のきさごのかずまへをかしく、にようくゝ烏のなかぬ日はあれども、たはれうたの噂たゆる事なし。かくばかり時めくことは、さき徒士のふりにし昔もきかず。さればはこやの山は指物屋のわたし細工とおもひ、みどりの洞とは十九文見せの箱のうちかとおほえたる、久かたの糖賣、あらがねの土こね、千はやぶる紙屑買、ぬば玉の夜蕎麥うり、手枕の赤坂奴、いそのかみふるかね買をいはず、花のお江戸に生れとうまれ、來りときたる人ごとに、言葉の花木ごとに咲きて、終にむだの山をなし、心ざしの露は草葉よりつもりて、笑ひの海をなす。げにや狂したるさまながら、いづもやみくも八重垣のへだてあ

るにしもあらず、かしの木の角もの、きれどもいよ〳〵かたく、仕出しの澁うちは、見かけよりいよ〳〵高きたぐひならん。張物をはる林のはな、敷きのしにあきの木のはのいろいろに品かはりて、興あるふしおもひすて難くと、いらざる肘をはりまがた、しかまのかちはだしにてひろひあつめたる數は、千うたにあまれり。しかはあれども、蜃の藻鹽はくめども盡きず、切りおとしの札は掲ぐるにもれ、秋のこの葉はひろへどもしげく、大門の切手も燈籠の夜はあらたむるにいとまなきたぐひ、わきて空とぶ鳥のもくあみをもれ、水にすむ魚の釣をのがれて、四方にたよらず、丸ののよすがなき歌はしらざる所なり。かれこれえりもとめて、難波江のあしかりしふしには筆を加へ、山の井の淺き心にはひいたりをやとひ、四方山人ふたゝびこれを書いつけて、德和歌後萬載集と名づけ、予にも序せよとよぶ。いなびも興なしと、はゞかりの咳拂ひにはゞかりを忘れて、筆をふるふも、此ふみの千世かけて住吉の松眞木にふすぼるとも、玉津島の波よけ杙にかゝりとゞまれとおもふ事しかり。

あめあきらけきよつのとしむつき　山手白人誌

すはらやのたのみごとをうけあひていらい、たはれ歌をえらぶこと、をとゝしのくれのせはしき比(ころ)よりはじめて、夏の日のながきことしにをはれり。いはゆる古今後撰夷曲の集のみにあらず、堀川百首になずらへてよみつらねたるためし、をかしといひ馬鹿といひ、その名おほくきこゆれど、この比のやうにはやりて、髭(ひげ)くひそらすともがらまで、たはれたる名をつき侍ることは、なほまれなり。口あひのかしこきもの、さかもりの席などにのぞみて、地口まじりのかたことを、御祝儀にのべたるなん、ひと通りはありける。しかるにわがきみもさかえてましんます、まんざいしふをえらびしよりこのかた、二とせばかりの春秋、四方の赤、のみかけ山のむらがらす、あけら館、まるの字のごとくまとゐあへり、落栗の落ちこぼれをひらひ、はなたちばなの香をかぎ出し侍りき。濱邊の肴市さらににぎはひ、都下の歌角力またさかりなり。たゞ遠慮會釋のむかし人すくなく、會しづかによりあひしおもかげをしたふのみにあらず、また杓子定規の、いま世のはやり人ぞやめきの志まつのはを知らしめむため、ことさらにかきちらすものならし。赤良さかづきの數つもり、あしもとのよゝとよろけ、なゝくせのなくてやまず、ふたゝびのえらびをはじめて、しもの句を聞きてかみをとひ、かみの句をうけてしもをたづぬるやうになりて、ふつか醉のあとをひき、すゞりぶたの殘りをあらすべきはしのひま〳〵、春つばき、夏はえのきに秋ひさぎ、冬ひいらぎにおなじき歌をはじめて、はなむけたびだち、くやみよろこび、れんぼれゝちの色々、めつたやたらのくさ〴〵、氣のよい佛のかほをなで、せつない時の神たゝきにいたるまで、部をとりまきをたばねて、森の木のはの數々に、心のたけ帚はきあつむるよし、みろく十年辰のとし、きのふとたつたる春のはじめこれをひろむ。名づけて徳和歌後萬載集とやらかす事しかり。

# 徳和歌後萬載集　巻第一

## 春歌

ふるとしに春たちける日よめる　紀春長

初はると歳暮をいはふ門かざりわか松もありくれ竹もあり

立春　朱樂漢江

佐保姫のきたる霞のうちかけはけさしも春のたちおろしなり

山手白人

につこりと山もわらうてけさは又きげんよし野の春は來にけり

元日　白鯉館卯雲

一夜あけて桃太郎月のどけしな霞たなびく鬼が島山

久かたの空錠なれや天の戸をあけたつ春のかぎりなければ　手柄岡持

きのふこそ煤はとりしかいつのまに葉竹そよぎて門松ぞたつ　酒上不埒

又ひとつ年はよるとも玉手箱あけてうれしき今朝のはつ春　もとの木網

通りますと岩戸の關のこなたより春へふみ出すけさの日の足　智恵内子

面箱のふたあけぼのの烏とび三番叟から春はえい〳〵　濱邊黑人

きのふまで年はせはしくはしりしが明けて日あしものどかなる春　竹杖爲輕



あけそむる年の要の扇うりよぶ一こゑに春は來にけり　大屋裏住

春來ては野も青土佐の初霞ひとはけひくや山の腰ばり　腹から秋人

かけごひの夜あけにおもき革財布かつぎし肩もはるは來にけり　宿屋飯盛

烏がなくあづま男の先ぶれは春たちかへる花の江戸入　名滿壽盛方

よる波にわけ入るしどのあまならでとりえてうれしあら玉の年　北川ほくせん

もゝとせになりても人は松の下くぐるときはのみどり心ぞ　内匠はしら

伊勢元日　から衣橘洲

ふるとしははらひきよめて手拍子をうちとに目だつ春の神風

卯のとしのはじめに　峯松風

うの毛にてついたるほどもきずなきは君が八千代の玉のはる哉

花道列禰

おそろしきとらの年の尾ふみこえて光のどけき玉の卯の春

はるのはじめうつし繪の書きぞめすとて　糟句齋余丹坊

あら玉のとしぐ〜弟子をとりあつめ寶をえしか家のかきぞめ

町屋早春　圖南女

元日はまだ春霞たちこめてふつかに見せをあけぼのの空

寶引　屋立綿純

寶引にだい〳〵どころにぎはしく手をしめ縄は親へゆづりは



櫻飴　山道高彦

雪とちり雲とながむる花なれば櫻あめともなりぬべらなり

霞　石部金吉

一越の調子をはるのうらゝかに山のかみんもかすむ鸞鏡

みよしのの山の葛のこのりにして霞の衣あらひはりせり　加陪仲塗

小川町霞　智恵内子

さほ姫の霞の衣ぬひたてにかゝるしつけのをがはまち哉

鶯　手がら岡持

しら雪はきえさうなるか鶯の聲をはるべにならふ法華經

さゝの戸をおこしに來なく鶯にしのゝめさませ藪の一聲　佐倉はね炭

山家鶯　山手白人

そりや春がきた山里のかくれ家に御慶とつぐる鶯の聲

菜畠鶯　梓弓八中

うぐひすのころもたか菜をおろぬきて畠をあつちこちにとびなく

鳥屋鶯　ちゑ内子

まづ徳をとり屋のみせの鶯は高いかひてにありつき日星

子日雪　銀杏滿門

老が身もかしらの雪をふりたてて孫やこまつにひかれてぞ出る

子日琴　四方赤良

この子日いづれに心ひかれまし松は十八ことは十三

峯の松ことのねのひにひく歌も聲をはるべや風のふき組　朝寐畫起



みやうがあらせ玉の緒琴を千代までとひくやはつねの松のみどり子　油杜氏ねり方

みどりなる松をねのひにひく琴は千代よろづ代も天下太平　相應内所

むつきなぬかの夜四方赤良あけらかん江加保茶

もとなり蔦から丸などとぶらひ來ませしに雪さ

へふり出でければ　棟上高見

蝶ととび千鳥とふれる淡雪のこよひはとまれ七くさのはに

おなじ夜あすは子日なればとて亥日小松といふ

題にて　朱樂漢江

亥日からもはやねよとの刻限をきけば小松をひけよつの頃

五明樓にあそべるあしたつとめてかへらんとす

るにあるじのけふは子日なり小松ひきてあそば
んとてとゞむるに　讀人しらず

きのふからよそにねの日のまつなればけふはひと先うちへひかまし
七種　於保曾禮長良

七くさをはやす庖丁かな火箸にほんの鳥のわたるまな板
若菜　手柄岡持

鏡汁のつまともなさめ山鳥のおろぬきそむるけふの若菜は
酒上不埒

野べにまだ葉ものびかねし鶯菜つめどかすかなねにこそありけれ
門松　馬場金埒

門松とりたる跡を見侍りて
七くさもはやすぎたてる門ならでしるしばかりの松のふたもと
初春大食の人をみて　賀茂季





はつ春にあがつためしの多ければ一座は除目おどろかしけり
はるの日麥飯をたうべて　銀杏滿門

麥めしの鉢のうらさへかすむほどくひつくしてや腹もはるの日
殘雪　やはり棟梁

雪とともに殘りし去年の借錢もまだきえやらぬかけ乞の帳
餘寒埋火　遲蒔千種

春ながらさむさに花のかじけ咲をりて火桶にいけ田炭かな
春巨燵　山手白人

ひとたびはたゝみし蒲團またかけてわかれの霜の置きごたつ哉
梅　横道黑塗師（肥後永崎一見）

山人のぬの子のかたにつけてさへ匂ひにけらし梅ばちの紋
青山六道の辻といへる所にて梅のはなの咲ける

を見侍りて　四方赤良

六道のやみにまよはぬ梅のはな色をも見るめかをもかぐはな

竹藪梅　峯松風

青々としげりし中にこの梅のはなはくれなる藪はくれ竹

ひら〳〵と藪からほつえつき出すは竹やり梅の花にやあるらん　あけらかん江

藪ふかくおされし梅がかせ枝もげに竹のねのはるは忘れず　銀杏みつかと

辻番梅　大原久知位

つじ番の梅のつぼみもつく棒は先みんなみへさすまたの枝

はるのうたとて　能とろ

青柳はら〳〵にしだれつゝと梅のすばえ出でるる



柳　山手白人

しら露は柳の糸のむすび玉風より外にとく人もなし

青柳はきりかぶろより生ひたちて若木の枝を長くさげ髪　加陪仲墜

青柳のみどりの髪をすきおろす櫛は銀むね三日月のかげ　檜皮釘武

はるの日内匠ばしらのもとにて刀わきざしのもとのによそへて春のうたよみける中に柄糸を　あけら菅江

雨ふりて地までかたなの片手まきほぐれぬ春の柳屋の糸　垢染衣紋

軒に鳶凧のかゝりたるを見て

さゝがにの糸のよるべの風をいたみ思はぬ軒にやぶる鳶凧　常産阿馬

草　若

とり捨てし野べの日かげもたけ火縄もえてみじかき春の若草　柿下手丸

早蕨

寒からぬ野邊の春風そよ〳〵と吹きたてられてもゆる早蕨　常産阿馬

猫戀

うば玉のよる〳〵おのが妻ごひにいつしか聲をからすねこ哉　銀杏滿門

野ら猫のおのが妻こふ聲たかく軒端の草のしのばでやなく　問屋酒船

初午

やれ太鼓はるきさらぎの午の日のみやは子供がうけもちの神　節松嫁々

初午生醉

初午やしるしの杉を神垣にまがいてをれるさかきげんかな　もとの木あみ

屋鋪初午



あづさ弓やしきのすみのいなりをもまつるや初のうまや別當　橘みさえ

千早振かみやしきから初うまの口をひかせてよるのとのさま　酒上ふらち

西行忌

とぶらふも他生のゑんる上人にふじの煙のそらなきはせじ　腹から秋人

道のべの柳ひと枝もちづきの手向にせんと折りてきさらぎ　もとの木網

菜花

きさらぎもすぎ菜まじりに菜花のさきてはくはぬ口なしの色　山手白人

五十首歌よみける中に春雨

はるさめの日數かさねてふるがるたうちつけにこそさびしかりけれ　忍岡きよろり

新宅春雨

新宅の壁もまだひぬ長の日にたらり〳〵とふすまはるさめ　出茂吉成

やうつりのかゆい所へ手紙どもかきあつめつゝかゞらはるさめ　糟句齋よたん坊

經師屋春雨

やくそくの日よりも紙をはるさめにへらをつかひてのばす經師屋　秦久呂面

春雨鼓

とり上げてうちしめりたる春雨に今宵つゞみのねごころもよし　酒上不埒

歸雁

うちすてゝ年をこしぢのかりがねはやよひかぎりにかへすべらなり　加保茶元成

年ごとに來てはかせいでかへれるは越路にたんとかり金やある　於保久旅人

越路にはいつきさらぎとまつ文の返事を今ぞもてかへる鴈　紀野暮輔

雲雀

足引の山鳥の尾のながき日にせいくらべしてたつ雲雀哉　栗成笑

蚍

山蜂のすがたに似れどぶん〳〵となのるにつけてあぶなげもなし　から衣橘洲

花

山姫のねまき姿か花の香をしめしあしたの雲の腰帶　朱樂かん江

散らうかとみな人あんじわづらへば花にも風は百病の長　逸咀英

さく花を何にたとへん飛鳥山きのふの雲はけふ雪とふる

飛鳥山のふもとなる人の家に櫻のさかりなるを

見侍りて

七重八重こゝの家にも櫻花かしこの山のあまり物かも　朝がよひ紀廸

東叡山花

中堂のこなたにたてるひともとは慈眼大師の御さくら花　から衣橘洲

飛鳥御殿山上野の花を一首によめる

花ざかりあすかとせん手ごてん山中に忍ぶが岡目八もく　遊女玉つる

吉原花

九重を一重ちらせし八重櫻けふこの里に匂ひぬるかな　濱邊黑人

西行のおめにかけたき普賢象はなの中よりはでな道中　内匠ばしら

身あがりの客のくるわにまちかねて遲櫻なる花のねすがた　さかづき米人

客はみなさいた櫻につながれてひかれくるわの春の駒下駄　もとの木あみ

鐘樓櫻

つけば散るつかねばすまの山寺のさくらにめでておそき入相　竹杖爲輕

裏店花

わび住は物ほしげなる鉢の木を下からのぞく花のうら店　山道高彦

二階見花

二階からをりてかざさん櫻花めのしたにのみ見るは口をし　節松嫁々

盲人見花

木のもとに杖をつく〳〵座頭の坊花のながめはあかぬとぞみる　紀躬鹿

啞子見花

花の香ををしみて口をうごかせどつんぼうほどもきかぬ春風

聾者見花　紀定麿

つんぼうはおのれが耳のとほ山にかすめる花の香はきこえまじ

乞食見花　加保茶元成

くれなゐと乞食も花をみるけふはつくなくよ入相のかね

こつじきのつゞれさすてふ袖も又はなの錦をけふはきてみる　相應内所

後家愛花　峯松風

櫻木をめづるばかりの後室の身も花よめといはれたりしが

花下忘歸　ふしまつのかゝ

よしや又うちは野となれ山櫻ちらずばねにもかへらざらなん

ひとり草庵の花を見侍りて　業寂僧都

罪なくて配所の月やいかならんみやこの花を錢なくてみる

花盗人　澤邊帆足

とがむれば七重の膝を八重にをり手をつき山の花の盗人

あやしさに花をる事やとがめなんそのぬす人のをさをとらへて　節藁仲貫

惜花　とはうも内子

友だちもいまちと待つてくれあひのかねのなるまでみよし野の花

寄花出替　文屋安雄

お屋形のさがりみすてゝいそぐらんよめいるさきの聟のはな見に

遊絲　加陪仲塗

春の日は須磨も明石も蝦夷錦うら一めんにあそぶ糸かな

曲水宴　馬屋廐輔

曲水の宴にひかれて三日月もともにながるゝ盃のかげ

下戸曲水　　膝元さぐる

盃をながしてはくむ山川のおもしろ酒や下戸の曲水

雛祭　　遅蒔千種

花がめに桃や椿をさしまぜて都のにせのひな祭かな

桃　　志月菴素庭

そろばんの位ちがうて三千年になるてふ桃の三年にさく

汐干　　四方赤良

かりがねをかへしもあへずさくらがり汐干がりとてかりつくしけり

出がはりの男女の汐干がりするを見侍りて　　浦邊干網

出がはりのかはりをおきつしほひ潟貝ふむ跡もにごさずに行け

桂川若鮎　　内匠ばしら

うつくしさ手にもとられず若鮎のすきとほり行くびんかつら川





白魚　　山手白人

春は又たれもたづぬる隅田川しら魚に子はありやなしやと

尾久白魚　　逸咀英

いつか日の長くなるとはしら魚のせたけものびてゆく春の尾久

井蛙　　へつゝ東作

身を守るかくれどころはこゝこそとちるを古井に蛙なくなり

苗代　　柿下手丸

苗代を田ごとの畔にかきあげて作大將の水のかけひき

杜若　　紀定麿

うつくしきかほやが沼の杜若あやめの花をひしぎこそすれ

款冬　　白鯉館卯雲

俊成の乗りあげられし身ぶるひに馬の露そふ井出の山吹

相性は金生水と思はるゝ水にうつりし山吹のいろ　子子孫彦

雨後藤

春雨にぬれて夜風や引きつらんはなより落つる藤の玉水　橘貞風

杉の木末に藤の花のかゝれるを見侍りて　澁川栗人

天狗でもすみなん杉の梢とてまとひし藤のはな高くみゆ

小手鞠といへる花をいけし見せにてあきものの

帳くりかへし算用し侍るとて　腹から秋人

そろばんの玉にもかへぬ帳面に又百かした小手まりの花

暮春　鶯摺江

くれゆくといへばどうやらよけれどもなんにもくれずにげて行く春

三月盡　柿下手丸



玉章に思ひのたけの長き日もけふばかりとやつかひきり紙　坂上竹藪

ふりもぎりにけゆく春のこれよりはすがらん袖もなつ衣かな

# 徳和歌後萬載集　巻第二

## 夏歌

更衣　　橘鈴成

さげ帶をみるにつけてもおたふくの衣かへうき尻にぞ有りける　　京間内則

世の中にたえて青葉のなかりせば衣がへをや何とせんにん　　佐倉はね炭

馬夫更衣

ふる布子わたはぬけども馬かたの袖にのこれる春のはな歌　　子子孫彦

青樓新樹

青樓の君のかぶろの名にしおふ若葉やみどりしげりこそすれ　　坂上竹藪

卯花





夏もまだ若武者とこそ見えにけれ卯花縅よろふ袖がき　　菊賀三味

世のひとのひく袖がきに咲きながらちると思へばみるもうのはな　　子子孫彦

月雪のみたてもあまりしら〳〵じしらけていはくあれはうの花　　四方赤良

旅路卯花

たび人も笠ぬぎて見よ花の名の卯のとき雨にぬるゝ垣根を　　加保茶元成

郭公

一聲の初音も高きほとゝぎす是ぞてつぺんかけねなしなる　　つむりの光

一日に八千八聲うけあうて山ほとゝぎすあはぬとぞなく　　星屋光次

きばさみをほとゝぎすまし夏木立かりすかしてもきかんとぞ思ふ　菊賀三味

三さがりあひの手ひいて郭公いま一聲の二上りをまつ　郭公多　もとの木あみ

ほとゝぎす山田のはらにあまるほどあまりたくさんすぎのむら立　智恵内子

郭公ひるともいはず夜なきするみどりこやまのかしましき聲　馬場金埒

ほとゝぎすなくねもちやうど八せんのはじめ終の空にふるほど　船聞郭公　小川町住

ふた聲ときかでぞ沖をはしり船なごりをしさの山郭公　佐倉はね炭



船出せしみなとを跡にほとゝぎす帆を十分にかけてなく聲　濱邊黑人

ほとゝぎす富士とつくばの天秤に兩國ばしをかけたかとなく　兩國橋郭公　紀躬鹿

兩國のはしとはしとのほとゝぎす今ひと聲をむさしにてなけ　みつまたの四季菴にて郭公を聞きて　四方赤良

ほとゝぎす鳴くやひとふたみつまたと聞くたびごとに珍しき菴　旅宿郭公　つむりの光

夏の夜のみじかき夜著に足引の山ほとゝぎすきく旅の宿　初鰹　讀人志禮多

われ一とまつさきかけて食ひぬるは人にかつをのさしみなりけり　馬屋廐輔

初がつをかふ氣はやみにあらねどもこれも子ゆゑに迷ふ雑子焼　よしのゝ葛子

鰹走地

地をはしる聲をからしの初がつをうりものこらぬ足のはやさよ　むせん法師

夏の夜かつを調理するを見侍りて

まな箸につこふ雫のすゞしさや月もさしみの夏の夜がつを　銀杏滿門

筍出隣

よばずともかきねをこして這出づる隣やたけの子ぼんなうなる　海老船弓

早苗

日よりよくうれしさなへをとりゞにうたふ田植のおほんたからか　便々館湖鯉鮒

罌粟花

むしけなくそだち次第のけし坊主花のちりけに炙もするゑぬる　清水立登麿

ちる花にうき世の名をばけし坊主からしてはたくあたまてん〳〵　書出田丸

五月五日

けふよりはひものあやめをときそめてきたる丹後の薄袴かな　腹から秋人

五月五日ある菴をとひ侍りしにあるじのひるねしてゐたりければ

蒲團きて晝寐にころり山椒味噌あんも節供は柏餅かな

端午の日普栗釣方が四方赤良のわごのもとへはらかけといふものおくるを見侍りて　宿屋飯盛

みくすりにこれをしめじがはらかけとよもぎのせくをあつくいはふか　河原鬼守

入梅の日雨ふりければ

けふからはさみだれん歌の發句とてまつ何山も雲にふし物

五月雨の比四方赤良のとぶらひ給ひし折から朝

いしたりければ　梅旭女（堺町泉屋）

とひ來ます四方はひるまもなき比のさみだれ髪で筆をとりけり

返し　四方赤良

入梅に旭もいまだいづみやを雨ふりはへてたづねこそすれ

梅干に鶯といふ事をよめと人のいひければ　實腹齋

口はすくなりてもなくか梅ぼしに皺のよるまで老の鶯

水鷄　澁川栗人

うか〳〵とわなにかゝりて身をくひなたゝく戸口は禍のかど

曾我祭雨　山手白人

曾我まつる五月の空は今も又かり場の露や雨とふるらん

夏月　志月菴素庭

夕立のくまなくはれし月の輪にのどもと過ぎしあつさ忘るゝ

猿猴のとらんと水にのはしたるかた〳〵の手は短夜の月　京間内則

ひとりねの蚊帳のうちへさよふけて桂男のいるは無遠慮　きし女（美濃神戸）

窓下撫子　遲蒔ちたね

そだてたる恩にあまへていたづらのした地窓よりのぞくなでしこ

鍾馗の畫をかけおける床のまに百合の花をいけたるをみはべりて　津無坊早耳

かけまくもしようきの姿おそれてや首うちたれし鬼百合の花

味噌こしといふものにほたるをいれたるを見侍りて　宿屋飯盛

螢とる數もひとふたみそこしによつゆもいつかむすびける哉

夕顔　檜皮釘武

垣一重ちよとゆふ顔のはなれ家は五疊ばかりの住居なりけり

山賤が柴のあみ戸のあけくれに所がへする夕がほのはな　帆南西太

闌蚊遣火

まれにくる蚊はたゝいてもふせぐべしいぶせあたかの闌の杉のは　朱樂かん江

夕立

夕立のはれゆく空のひとふりはくも切丸といふべかりける　さくらのはね炭

闌夕立

夕立の雨に追はれてにげ水の雲を霞が闌のたび人　川井物梁

船夕立

船の帆のはらめる風に夕立の雲のはやめやふり出しけん　四方赤良

夕立の雲のうき浪たつと巳のふり日を三保のあまの釣舟　大屋裏住

吉野丸てるに高尾は夕立の駒形のせをわけてふり行く　門限面倒

夕立の雲もつき地は先はれてしのをつく田にかゝる親船　平生三里季保

蓮池夕立

夕立のにごりにしむはいやくゝと蓮はかぶりをふる池の中　山手白人

蟬

ぴつたりといだきしめつゝなく蟬は日々にかよへるきむすめのもと　百足こがね

別莊納涼

時ならずふり來りたるすゞしさはこれ水無月のしも屋敷かな　四方赤良

吉原納涼　山上猿成

青すだれかけてあつさもなかの町客と風とを待合の辻　山手白人

屋根船納涼

千早振神田がはよりこぎ出でてすゞむは天津兒屋根舟かな　圖南女

三またの中洲四季菴を

蚊もなかずあつさもなつの住みよさはすゞしき菴といふべかりける　澁團扇にかきたる市川團十郎といへるわざをぎ　橘八衢

の畫に

大汗をかきの素袍のたもとにもしばらく風をやどしぬるかな　樹陰心太　峯松風

水鉢にすゞしくもりの下陰は人の目につくところてんみせ　土用干　紀定麿

夏の日のあつさぞまさる土用干地赤の色ももゆるばかりに　眞桑瓜　山道高彦

よいたねをたんとまくはの瓜づるにこがね花さき實のなる子村　まくは瓜と西瓜とひとつさらにもりたるを見侍りて　四方赤良

砂村のえにしの瓜となるこ瓜ともにもらさぬ水菓子の中　姫瓜　峯松風

夏くさの中にちぎれる姫瓜はいかなる人のおとしだねかも　御祓　臍穴主

あたらしき染帷子の麻のはもけふのみそぎと人やとるらん　山川夏祓　唐衣橘洲

山川に風のかけ乞それならではらへば夏のしがらみもなし

隅田川御祓　もとの木網

中とみの祓をすだの夕こえてまつちのわをやくゞる川風

質屋御祓　網破損はりかね

みな月もきるゝけふとて御祓川しちのかたしろ流れこそすれ



# 徳和歌後萬載集　巻第三

## 秋歌

立秋　大屋裏住

今朝ひと葉ちりくる庭のかんな屑柳の枝をけづる秋かぜ

龍宮立秋　紀おさ丸

さすしほに木葉がれいのちりくるは秋風たつの都にやふく

立秋風　秋風女房

秋きぬと風がしらすや文月のふうじをきりの一葉ちらして

初秋　石部金吉

ひやゝかな風をまるらせ候と秋のふうじめほどく文づき

腹から秋人

文月のけさや一筆しめし野にまるらせそよと秋の初風
　文月ついたち赤坂なる桐屋といへる家のあるじ
　をはじめてとひ侍りて　朱樂かん江
秋もけふ小判のきりや一葉よりまづ落ちそめて藏にみつ次
　風鈴告秋　から衣橘洲
風鈴の音はりんきの告げぐちかわがのきの妻に秋のかよふを
　へつゝ東作
まづあきをしりふる軒の短冊もすこしは友となる風鈴かな
　四方赤良
ふうりんのりんとひゞきし秋風は荻の上はの一文の錢
　米春知秋　眞竹深藪
米つきはひの出入よりとる杵の臼の數にや秋をしるらん



七夕　楚泉 尾張
ひと夜をばもゝ夜とちぎるおり姫になぜお子たちが出來はなされぬ
七夕にねがひの糸のありたけをくりかへしつゝかけていのらん　絲瓜皮也
かさゝぎのはしは雲井のてうしよくかけわたしたる琴のかよひ路　湖鯉鮒
今宵しも手向にせんと短冊をかくや娘も孫もひこぼし　澤邊横行
星もさぞ今宵ひとよのあひびきをそこはかまとや待ちわぶるらん　銀杏滿門
おり姫の年は十六さゝげばたたれも女房にほし合の空　臍穴主

青樓七夕　今出赤蕾

まれ人をこよひはどうぞほし合の空だのめなる天の川たけ

七夕絲　一升夢輔

七夕のいと口きらぬむつ言にくたかけ鳥のくりかへしなく

七夕別　遲蒔千種

舟をさにとはばや星のわかれには楫も機嫌もとりにくきかと

七夕後朝　あけら菅江

よべかりし硯をしばしとめ置きてほしやけさかく文月の空

七夕のひとよねまきのあかつきをうらみてかへすかし小袖かな　婆阿

かさゝぎのあかつきかけてわたれるは宵にひきかへにくき口ばし　多田人成



七夕のけさのわかれのとめられば天のかはせにはらもかへなん　小川町住

天のがは空色衣あらひあげおり姫のりをつけてほしけり　天河洗濯　根香來無器用

けふこそはあはんと思ひし女郎花人にかはれて水くさの市　吉原草市　やはり棟梁

櫻からはや草市と露の間にうつりし秋も花の色里　峯松風

くつわやがくらきにかひしのこり荷を近所の人へうりの馬道　蓬萊歸橋

數珠のたままつるしたくの草市に百八もんじけふやふみ月　婆阿

盂蘭盆

うら盆にかんなかけとりせめくれば身はみそはぎの露ときえたり　腮垣金

なか〳〵になきたまならばとばかりにかけはたらるゝ盆のくりごと　山手白人

あるやうになしても物のさびしうて何やらたらぬ玉まつり哉　橘貞風

蓮のはに置きにし露の玉まつり世々の佛に水手向けばや　内匠半四良

靈棚露滋

蓮葉に手向ける水はにごらねど野もせあざむく露の玉だな　あけら菅江

盆踊

手を出して立つたり居たりいそがしくするは給仕の盆踊かも　出すは耳彦

蓮飯

めしはみなくひつくしたる蓮葉にのこれる粒や露とあざむく　瓢から酒（酒上熟寢改）

神田川にて靈棚を舟につみおくるを見侍りて

牛馬をやめて佛も西方の十萬坪へのりあひの舟　山道高彦

角力

春ならで秋のちぐさの花ずまふさそはぬ風に羽織ちりめん　おそ蒔ちたね

荻

秋風が音頭あげたる伊勢をどり濱荻の葉はさゝらにぞなる　加陪仲塗

萩

吹きまくるすそ野の風に仙人もおつるばかりの白はぎの花　五疊多他見

もゝ草の中なる萩にみとれつゝいくせんにんも通をうしなふ

窓下萩

やがてもう彼岸もあくる引まどの下のを萩ぞあかぬ色なる　ものゝふ八十氏

卜者見萩

うらなひをおくの細道おしわけてめどきの萩の花をみやぎ野　秦久呂面

薄

御らうじろいとすゝきとてをしへねどいろはにほまで出かしをるのを　權宗匠梅堂

吉原女郎花

此さとにこがねの色とさきぬるをみなへしをりて床花にせん　臍穴ぬし

葛

ものゝふのくずのはとはとあはせても臆病風やうらがへりぬる　二歩只取

苅萱

秋の野に風ふき出せば何事をかしかるかやねたり起きたり　堂伴白主



槿

朝顔はまことに日々にしをるれど又ひゞ〳〵にあらたにぞさく　裏堀蟹子丸

さんやの里のほとりにてかきねに朝がほの花さけるを見て　四方赤良

たつた今わかれてきたの里ちかく目にちらつける朝顔の花　手柄岡持

露

ぬれぬさきこそいとひしがおき〳〵て末は流るゝ質草の露　柿下手丸

百草の葉ごとの上におく露は丸藥ほどの玉とこそ見れ　書出田丸

芋葉露

錢金はもたれぬものか芋の葉にたまれば落つる露の玉銀　白鯉館卯雲

蟲

夜なくはめづらしからず晝の野へ蟲のねごとを聞きにこそゆけ　四方赤良

秋の野の千ぐさはやんもしら露のふつて出でたる鈴蟲のこゑ　加陪仲ぬり

鹿

秋の野になく棹鹿の角なればさいになりてもめやこひぬらん　千枝有竹

なく聲のほそうてながく聲ゆれば棹鹿とこそ人のいふらめ

さがみのくにの山中にしかの聲きかんと一夜と

まりて　根岸法師

瀧の音にまぎれてしかときこえねどもしやあれでもあらうかの聲　柿下手丸

鴈

鴈がねのかた田にこそは落ちつらめいたく鳴きぬる夜半の聲かな



花街鴈

玉づさをかけてくるわにかりがねもおつるや多き人あしの中　浦邊干網

陣中雁

つはものの氣はは弓の陣中にしのびのつらをみだすかりがね　海老船盛

一つらに雁は野陣をはりまがたしかまのかちを告げにきたより　腹から秋人

霧

風寒くやぶれ障子をはりかへてきり吹きかくる秋の夕暮　忍岡きよろり

月

月見てもさらにかなしくなかりけり世界の人の秋と思へば　つむりの光

こよひこの月は世界の美人にて素顔か雲の化粧だにせず　蓬萊歸橋

十五夜月　朱樂菅江

天の原月すむ秋をまふたつにふりわけみればてうど仲麿

しら露の玉を今宵の十露盤に三五十五の月とこそおけ　無錢法師

何千里てりわたるともけふの月ながめ盡さん目のとどくだけ　其風 尾張

十五夜くもりければ　銀杏滿門

大空に名高き月はありながらひとつ星さへみせぬ雨雲

望月の夜の空さだめなければ　四方赤良

千金の名だかき月の雲間よりせめて一二分もれ出でよかし

おなじ夜雨はれければ　鶴のかこ女

此頃のこほれかゝりし空も又くもなくこよひうまれ月影

十六夜月　節松嫁々

かたぶけしきのふの酒の二日醉そらにいざよふ盃のかげ

立待月　秋風女房

望月とあいた一夜のたちまちにすこしかけてもかけのさやけさ

はづき廿一日の夜月を見侍りて　大事三味

そろばんのそろ〳〵かけし月かげをみやさん七の二十一日

兀山月　智惠内子

てら〳〵と月のかつら男さす影もはづかしげなる老のはげ山

三股月　天地玄黄

けんをうつ上手の手から水の月すむゆさんなの指のみつまた

さかづきのさすてひく手に三味線のかはにうつれるかげをみつまた　芳野葛子

大工見月　飛塵馬蹄

手細工に窓を明くるはくもなくて月のすみうちすみよるべし

經師見月　川井物梁

ひとはけにかけ地のうらをうち見ればのりのかげんもよくつきの影

瞽者見月　から　衣橘洲

すむ影を見る目なげくもせんなしとひとりまさぐる琵琶の半月

月前雁　大石小石みかげ

鴈がねの鍔もとまでも鳴きつれて落つるは月のさやかとぞみる

月前琴　かから　衣橘洲

松の風ふき自在なる月見かなはらうて雲はみなつくし琴

月前鼓　紀定麿

小つゞみのねながらかしらうちもたげ影もみつ地の月や詠めん



月前酒　から　衣橘洲

さすかげのあかきは酒のとがながら月にゆるしの色とこそ見れ

月前枝豆

枝まめのからもやまとも見る月に雲はいづくへはじきやりけん

月前芋　ふし　松嫁々

てる月の山ばかりかは里いものますのすみからすみのほるかげ

今宵ぞとみがく光の桂男にいもがすがたは衣だにもきず　圖南女

月前兎　常産　河馬

玉うさぎはねてなぐさめ十五夜はおのが毛ほども月にきずなし

月前駒迎　望月あきよし

逢坂や月に名高き關角力けふの勝負は引きわけの駒

九月九日　八張棟梁

此酒をのむはそくさいえんめいがそのふる事ときくの盃

菊　横道黒塗師

我やどのきくの酒手のけふごとにいく代つもりて借錢の淵

たがかたへもらはるゝやら鍬の上にひともとおける霜の白菊　山手白人

前栽の菊見んとて人の來りければ　酒上不埒

をかしげにくるへる菊の花見んとたちよれる人のはらやかゝへん

巣鴨菊　味噌こしきぶ

さかりなるうはさをきくや祖父婆々も杖にすがもの花の見物

水鳥のすがもに植ゑしひとかまへ菊のさしこと見ゆるませ垣　多田人成

巣鴨のさとに菊をもとめ侍りて　馬屋廐輔

すがゝきのすがもにそだつ禿菊けふつき出しのけいせいが窪

飾師愛菊　畠野あぜ道

かざりしの世話やきつけの菊の花今朝はめつきと色まさりける

菊花泛酒　銀杏滿門

一りんに千とせをちぎる花ぶさはよはひのぶるときくの盃

眞間の紅葉をたづねて　檜皮釘武

暮れなんと氣をもみぢばの友もあらばひとりのこらんあゝまゝのかは

十三夜月　あけら漢江

きく月の月見はもちの月ならず籬に花のさけや盃

どこぞへかちとおいてきて影さへもたらぬはなの下の長月　檜皮釘武

吉原十三夜　堂伴白主

くる客は月の舟やど引きつれて足も空ゆく十三やぼり

駒迎　しらぬひのつく〳〵法師

望月のこまは月毛もひくべきを關の清水にかげ見ゆるなり

搗衣　澤邊横行

洗だくのひるならで夜もいとまなみ居ねぶりながら衣うつゝか

妾宅搗衣　峯松風

君ならでたれかきぬたの衣うつ槌にてかけの宿の淋しさ

隣家砧　紀定麿

となりなる砧もちかき壁ひとへかたつち落ちてうちやぶれたり

鮎　横道黒塗師

身より出すさび鮎ながら川下に落ちてかゝるはあなあはれやな

新蕎麥　大飯食人

新そばの時分はよしとひきぬいてかたきうつこをほまれとぞきく

秋鰹　雀酒盛

折もよき秋のたゝきの烏帽子魚かま倉風にこしらへてみん

乞食見紅葉　何多良方士

乞食小屋かどに立田の紅葉見てきのふもけふもあきたらぬはら

紅葉盗人といふ事を　馬屋廐輔

しかられて跡しらなみのたつたがは顔も紅葉にかざす折枝

日陰紅葉　奈良花丸

あきはてし埒の日かげのもみぢばをいつそむるぞととへばあさつて

落栗　渡海里花成

ひらふ數ふどうのあるもことわりや毬はすなはちくりからとなる

暮秋　山手白人

花すゝきほゝけし袖をふりはへてさらば〳〵と秋ぞくれ行く　唐來參和

よしさらば〳〵とわかれゆく秋をまねく薄やいとま乞する　古瀬勝雄

質屋九月盡

秋ふけて露のたま〳〵おく質もこの月ぎりとなりにけるかな



# 徳和歌後萬載集　巻第四

## 冬歌

初冬　手柄岡もち

けふ神のおたちなればや風をあらみ空さやけくも木葉（このは）みだるゝ　唐來參和

花街時雨

冬がれてくるわにかよふ神無月しぐれも客もふりみふらずみ　子子孫彦

問屋場時雨

先ぶれの時雨（しぐれ）はれまの問屋場にうき雲助や跡にたゞよふ　置石村路

落葉

木がらしにちりぬるいろはふみちらしやまけふこえて冬は來にけり　よしのゝ葛子

水茶屋落葉

夕ぐれに客も落葉とちりゆけば木末さびしく水茶屋の床　津無坊早耳

あたりちかき人のもとよりるのこの餅をさめぬ

うちとておこせたりければ

重箱のをはぎのもとにふするの子さめぬうちとておこしけるかも　書出田丸

夷講

夷講（えびすかう）げに商人の馳走とて客もまうけの席につくなり　其箐琴成

大根地をいづるといふことを

たがたねをこゝへこぼして大根のちをはなれてもかくそだちけん　山手白人

河豚汁

われがちにあらそうてくふぐと汁もりかへのある命ならねど　帆南西太

雪中河豚

魚の名をむざとはなすなけふの雪に身をあたゝむる種か島ぞや

醫師食鰒

雪の日に千里もはしるとら鰒（ふぐ）は竹のやぶ醫もくすりとやくふ　山道高彦

武士食鰒

もとよりもいかものゝふの腹なれば鐵炮汁の玉はあたらず　山手白人

芝居顔見世

評判ははげしかれとて顔みせにみな手をうつの山おろしかな　濱邊黑人

かほみせのその人よりもそは〳〵でとちめん棒の手うち連中　もとの木網

顔見せの朝の雜煮を

三番叟鈴菜をいれて顔見せの雜煮の汁もたらりらゝりら　平秩東作

朝霜

日のかげは小春もまじる朝の霜どちらが冬とふみわけてみん

橋上霜　鹽屋辛人

雪ならでしろきは霜のはし柱かへるもすごしゆくもうしみつ

曹請小屋霜　堪忍成丈

寒き夜は屏風をかりのふしん小屋明くれば門にたつ霜ばしら

氷　臍穴主

かはづらのあつき氷と名にたちて身うごきならぬ借錢の淵

硯氷　紀定麿

筆をもてうちかゝまほし墨水のこほりて寒きはだか硯は

枝川氷　へつゝ東作

さくら川枝も氷のはるまではとぢてひらかぬ波のはつ花

澤水氷厚　節松嫁々

澤水にかれたつあしのあかゞりもなくほどいたく氷るにけり





寒夜月　馬屋まや輔

しん〳〵と寒き月下の門徒寺僧のたゝくは鳥のほねなり

千鳥　臍穴ぬし

ゆきかへり友よびかはしなき上戸顔もあかしの浦千鳥足

冬の夜洲崎なる望汰欄にあそびけるに庭におり

たちて月をながめ侍るとて　四方赤良

ほうだらになりて海邊をながむれば月影さむし宵の口鹽

空と海ぴつたりつきの中川のばら〳〵松にたつ千鳥かな

水鳥　手柄をか持

つるぎ羽の劍お祓をふりたてし五十鈴の川のおしのふるまひ

朝日さす人もなければとりもちのさほのかはらにねぶる水鳥　奈良朝起

音すれば人もみつよついつとなく池のふるびをつけにくる鴨　勘定疎人

枝川に餌ひらふ鴨のあしの色はながれもあへぬ紅葉とや見ん　蓬萊歸橋

冬の歌とて

冬ごもる寒のうちとて霜ばしらたてゝ氷のいたもはるなり　膝本左愚留

霰

吹きちらす風もあられの音せしば屋根をこけらのそのはずみなり　勘定疎人

雪

雪見とはいつの世よりのたはけぞとそしるはいつのよのたはけぞや　馬屋まや輔

ひとむれの奥女中とも見ゆるかなつもる木ごとの綿帽子ゆき　四方あから

土藏雪

白雪のふるつゞらさへなき藏はなんでもかでもつめたかりけり　紀定麿

猪牙舟雪

苫かけて水のおもかぢとり梶とこぎゆく猪牙の跡のしら雪　子子孫彦

堺町雪

今朝見れば木ごとに花のさかひ町あら面白の雪のふり付　あけらかん江

雪中鷺

ほそみぞはふりつむ雪にうづもれて鷺も泥鰌やふみなやむらん　銀杏滿門

雪中酒宴

盃の手もとへよるの雪の酒つもる〳〵といひながらのむ　もとの木網

雪をくふ人によみてつかはしける

ふみなんはおしきにもりてきこしめせあしだの歯になかけそ初雪　平秩東作

鷹狩　銀杏滿かと

ふる雪にどこからどこかはし鷹の目にみかり野のひろさ知られず

炭竈　加陪仲塗

眞黒な熊野の山にすみやきの手足もあらく生れつきの輪

神樂　五疊多他見

まつ白につもるそばから黒けぶり是こそほんの雪と炭がま

煤掃　加陪仲ぬり

禰宜どもは寒さしのぎにかん酒の匂ひかぐらの舌つゞみうつ

淺草市　鈍奈法師

すゝはきは落葉の後にさても又ちりみだしたる庭の面かな

かちぐりをまけたとよぶもことわりや淺草市のうらは六郷　津良河厚

ふたつなきあさ草いちのにぎはひはまことに江戸のかざり物なり　紀定麿

はりつよく直段はひかぬ觀音の千の矢先や市のはま弓　無錢法師

隣家餅搗

垣一重こし粉をつけてたまはるは居ながら自由自在餅かな　四方赤良

歳暮

年波のよするひたひのしわみよりくるゝはいたくをしまれにけり　手柄岡持

此ものは花の春べといそぎ候お通しなされ年の關守　つむりの光

とりくんでまけじと思ふ角力さへ年の關にはかなはざりけり　白鯉館卯雲

光陰のあだ矢にとしはたつか弓月日をとむるせき弦もかな　竹杖爲輕

としの矢はさうぶ刀のつかの間にはや破魔弓と引きかはりぬる　無錢法師

たつた今年もこゆべきよし垣をこそぐりてまつ春のまぢかさ　子子孫彦

すゝ掃ははやすぎの戸のあけたてにはしり加減もとしのくれ縁　四方赤良

かぎりある年さへくれてゆくものをなどふるかけのとりに來れる　多田人成

としはくれにき

立ちて見し柱暦もねころんでよめるばかりに年はくれにき　朱樂菅江



五十三になりける年のくれに　河原鬼守

としの關こすや驛路の鈴ならで我身ふりゆく五十三次

武家歳暮　唐衣橘洲

すゝとりて弓は袋にをさめたりせめくる老を何でふせがん　四方赤良

ものゝふも臆病風やたちぬらん大つごもりのかけとりの聲　峯松風

かけ乞のたゆみもあらぬものゝふは勇氣をはるにのぶる返金

花街歳暮

鶯もかならずはやく來なんしと年のくれぐ梅がかね言　一升夢輔

疊屋歳暮

疊屋がさしつまりたる年のくれふまねばならぬ床のかけぬひ

節分　もとの木綱

あさくらや木の丸のみの山椒も福茶に年を名のる節分　加陪仲塗

除夜

借錢は首たけつもる大晦日門の雪さへはらひかねたり　紀躬鹿

門ごとにあしたの春をまつかざりたつた一夜のことしなりけり　四方赤良

いかなりけるとしのくれにか

金はありかけもはらうて置巨燵とろ〳〵ねいりつかんとしの夜

此うたある人のいはくよみ人しらずと

# 徳和歌後萬載集　巻第五

## 離別歌

別　臍穴主

せんたくの後は袷となるまでもまづひきときの引き別れぬる

北川ほくせん浪華にまかりける時　へつゝ東作

なにはがたあしかろ〳〵といてもどれ友よぶ鶴のをりからもよし

竹下氏の餞に　濱邊黑人

たつてゆく足からとむる關もがなはこぶ思ひのたけの下道

もとの木阿み上つけの國にまかりける道すがら　置石村路

思ひやり侍りて

行先も熊谷ざくらさきぬらし春のながめはふかやと思へば

千玄室さみだれの比ふるさとにかへるあしたむ　馬場金博
まのはなむけすとて

雨もはやにぢりあがりにあがるなりお茶をたて場にしばし待合　門限面倒
いづの國あたみへゆあみにゆく人を送るとて

紀行（たびのき）の狂歌に詠みてきてたもれ伊豆のお山の言のはぐさを
かんつけの國いかほの湯あみにゆく人を送るとて

てはる名の山の名もあれば　秩父根努類雄（上毛）

人なかでしわい顔すな氣をはるなきんせんとうはとめ湯にしなさい
友とする人わづらひて遠き旅路におもむきける
をおくるとて　普栗釣方

花ぐもりかゝる病もはるの旅さなわづらひそ後は快晴
なにはの旅のやどりをいづるとてそのいへの名



によそへて　世入道へまうし

うつしゑの駒に姿のにたるかな瓢簞屋よりいづる此身は
とみにたびだち待りし時友どちのもとへ　酒上不埒

夢になりとしろしめしたかけふふじに旅をするがへかどでなすのを

## 羇旅歌

旅のうたとて　古家雨漏

ふる郷へいそげばまはる道のべにいくたびとなくとくる笠紐
狂言師旅行　於保久旅人

旅寐して起せば夢かうつほ旅いそげど道は八里くりやき
盲人旅行　峯松風

座頭の坊たのむは手ひき足まかせ旅の空へと思ひつく杖

奴旅行　置石村路

鑓もちのふるともよしや草枕髭にやどかせはなの下陰

紺屋旅行　望月まん丸

旅衣そめて幾日になるみがた何とこんやのとまり定めん

海路　手柄岡持

帆ばしらのしの字もねせてとまり船かくてはおきにかゝる事なし

題しらず　唐來參和

日のあしの高なはへもうつきにけりならはぬ旅のうしのあゆみも

足引のやまとめぐりの旅づかれ笈もおもげに瀬田ら大橋　馬屋廐輔

木曾路にて　加倍仲ぬり

うきことをしるの匂ひもくさ枕くはずにおくや露の玉味噌



川留退屈　四方赤良

大井川かも川よりも川ごしのちんが心にまかせざる雨

春の末さやの中山を過ぐるとて　星屋光次

花ぬりのさやの中山さしてゆけば鐺にさはる岩つゝじ哉

傾城思故郷　澁川栗人

八朔に白むくをきるあつさにはタがほだなの下思ひ出す

夏の末輕井澤を過ぎ侍りしにいと寒かりければ　二歩只取

夏衣うす井峠にきてみればさむさながらも身は輕井澤

百餘里のふるさとをへだてゝ江戸の月を見侍りて　庭桃丸

もろともにあはれと思へお月さま國のなじみはおまへばかりぢや

一里塚秋風　内匠半心良

はたかげんよい程がやの一里づか秋風すゞしかたびらの宿　渡海里花也

長月の末あけがたに箱根山をこゆるとて

山のはの錦につゝむ月の玉いるや箱根のふたのあけ方　五足齋灌園

旅宿炉

さすが又遠州路とてはたごやに炉をきり釜をかけ川のやど　橘實副

旅宿巨燵

あしがらやくもれば富士のすそ寒く旅のこたつにあたら夜の月　油とうじねり方

くたびれて巨燵へふじの腰つきり足高山をさし出したり　つのくにあつもりそばの店にてかたへの人にさやき侍り　驥山人東阿播州三日月

よしつねはくはれぬそばのあつもりをくまがへ給へひらに平山



江のしまにまうづるとて袖のうらにて白髪貝をもとめて　圖南女

旅ごろも袖のうらかたまさしかれきたるかひあるもろ白髪貝

みのの國にまかりし時笠松といふ所にたびねして　栗成笑

ふるさとをはるゞこゝにきてみればかくれみのぢや笠松のやど

寄餅羇旅　檜皮釘武

むしやめばついてそのまゝやれぶとん柏にねたるあんなかの宿

箱根にて　世入道へまうし

仙人になつたかしらぬ雲にのりはこね八里を歌でこすとは

大名旅行　見付内住

關の戸も明くる横雲たな引きて一時早の馬やこすらん

# 徳和歌後萬載集　巻第六

## 哀傷歌

ある人をいたみて　横道黒塗師

花の根にちりしすがたのをしければ衣かへうき御經かたびら

竹杖すがるが父の思ひにて侍りけるときよみて　あけら漢江

つかはしける

申すべきことのはもなしあしすだれあのよこのよのふじの別に

父の身まかりにける時　竹杖爲輕

くりかへしくりかへしつゝなげくなり涙のたまの珠數の親粒

はゝの七めぐりの忌日になむあみだぶつのもじ

をかしらにおきてよめる歌の中にあ文字　濱邊黒人



あとまでも袖の涙のかわかぬはぬらせし膝のむくひなるらん

物ごとうときが好みてからやまとの文どもよみ

けるがみな月ばかりに身まかりければ　智恵内子

あつめつる窓の螢の影きえて涙や文のしみとなるらん

普栗釣方歌角力の勸進して東西にはしりめぐり

しがそのことなかばにして身まかりければ　四方赤良

歌ずまふ夢のうちわをあぐる間に西のかたやへ入りにけるかな

問屋酒船

死ぬるまで狂歌をしでの旅角力あとに言葉の花はふりけり

わかきやもめのほとけに茶を供するを見侍りて　柳直成上モ

後家たつるはなかもうすき茶せん髪あはれはよそにくみてこそしれ

寄松無常　道具屋長持

年ふべき松もひつぎにつかはるゝ身は四分板のはてぞはかなき
　寄十露盤無常　坂上竹藪

とりべ野の烟とたてし算用は涙の玉のおきやまどへる
　寄酒無常　續松ひで近

のまほしと思へど酒もなき跡はしるしの杉の樽ばかりなり
　寄醴無常　濱邊黑人

きのふ見し人はひと夜にあま酒のあまりはかなとすゝりあげつゝ
　寄鰻無常　七轉八興

立ちのぼるつひの烟の香に匂ふ此身は死出の旅うなぎかも
　寄屁無常　紀定麿

すかしべのきえやすきこそあはれなれみはなき物と思ひながらも
　祖父素翁のはかにまうで侍りて　平秩東作



孫をかふよりのたとえもはづかしくみはかにしげるゐのこ草哉
　雲樂齋いもうと身まかりけると聞きて　四方赤良

はかなしやあのよ十萬おくさまにならんとてしもおこし入れとは
　辭世　白鯉館卯雲

食へばへるねぶればさむる世の中にちとめづらしく死ぬもなぐさみ

# 徳和歌後萬載集　巻第七

## 賀　歌

寄都祝　　箭木有政

君が代は都のまちをとかへりの松原とほりつゞく千本

寄橋祝　　堂伴白主

うけわたすなりもいく代をへの字にてやはり昔のまゝの繼橋

子子孫彦のもとにて新宅によする祝といふこと　　朱樂かん江

を

水縄もひづまぬ小石かはらぶきいはほとなりて動なき宿　　紀定麿

萬代とことぶく龜のをがは町鶴のはしらをたてし新宅





かんな屑つきぬ言葉もあたらしくたてし柱のかぞいろはつけ　　四方赤良

木のたくみ墨さしに筆たて具より今日は疊を敷島の道　　子子孫彦

内匠はしらがもとにて柱によする祝といふ事を　　四方赤良

飛禪たくみたてし柱のかず〳〵はよむともつきぬ三河萬歳

寄筍祝　　望月章甫

たけの子のかはらぬ御代はめでたやとむき出して社いふべかりけれ

寄硯祝　　夕霧籬

やはらぎし御代はかはらの硯石されば千とせをへるぞめでたき

寄刀祝　　節松嫁々

いにしへのみだれやき刀もしら鞘にうちをさまれる御代ぞやす國

寄琴祝　名萬壽盛方

しらぶればふきじざいとぞうたふなるめでたきことの組の數々　門限面倒

寄三線祝

四海波しづがふせ屋もさみせんの調子くるはぬ御代にぞ有りける　酒上不埒

寄袋祝

しめくゝりよくをさまれる大君の御代は千秋ばん袋かな　垢しみ衣紋

寄手毬祝

君が代の數とりゞゝにたはれ子も袖かなぐりて手まりつくなり　名萬壽盛方

寄松魚祝

竹のはをかいしきにせし松の魚ひとふしごとに千代やこむらん　野見鉄ごん墨かね爲馬

ひとふしをうたふかつをのいはひ歌はやしてうさよいさらに盛れ





寄謠祝　紀定麿

うたふ聲つれてこの屋にみちゆきはさしもめでたき次第なりけり　腹唐秋人

寄生醉祝

足もとはよろゝづよもかぎりなくのぼりてゆくや老のさか酔　四方赤良

髪置祝

ことしよりつむりにけしを置きそめて千代萬代の數とりにせん　千里亭白駒

袴著祝

かたなをもさすがに武士のたねぞとてかみしもつきをいはふ袴著　無錢法師

元服祝

元服をするがの富士の根ぞろへに雪のしらがの末いはふなり　四方赤良

婆阿五十の賀に酒によする祝といふことを

又もみん榮花の夢の五十年粟餅くはず酒をのみ〳〵

家居を二間たてつゞけたる人を賀して　節藁中貫

高砂のうらを一見せばやとて二けんましたる家のはりまぢ

吉奈の溫泉にて岩淵三度屋といへる家のおきな

にあうて　へつゝ東作

あやかれや東方朔が九千歳手折りし桃の數も三度屋

神田祭みんとてよべより河岸高積がもとに酒の

みしにあるじ明日のまらうどのまうけに强飯を

あつらへおきしがいかゞしたりけん二所よりも

て來りければ　四方赤良

せいろうをかさねぐ〳〵のめでたさはいくらありてもあかの强飯

渡海里花成海の上にてはやてにあひ舟すでにく

つがへりなんとしければ

「夢のうき世今ぞいのちは月の舟眞帆にぞ西への

りの道かな」とよみ侍りしがふしぎに風なほりてつ

つがなくかへりけるよろこびに　紀定麿

災難にかゝる辭世の歌までもよみがへりたる君といはゝん

牛込所繁昌といふことを　遲蒔千種

牛込をうしとないひそほにほさく早稲田おくての道しある世に

龜井戸柳島に山里もとめし人をことぶきて　一富士二鷹

龜井戸に鶴のまふべき山ざとは所がらなる柳しま臺

やごとなき君のひとの家よりやしなひ君よびむ

かへ給へりける時松の島臺の足折れければ人々

いみ給ふをいはひなほして　風來山人

あしといふ事はのこらずとりすてゝよき事ばかりのこる若松

池田氏にてむすめの子うまれ給ふを賀して　佐倉はね炭

三番叟なによりもつてやすゝとよろこびありやことにじやうさま　もとの木網

劍術によする祝

あせ水をながしてならふ劍術のやくにもたゝぬ御代ぞめでたき



# 徳和歌後萬載集　卷第八

## 戀歌上

初戀　銀杏滿門

こはゞ〳〵も人のみる目をぬき足にふみ初めてけり戀の道芝

寄山初戀　唐衣橘洲

くるしともいはで心に納太刀これやわけ入る戀のはつ山

忍戀　加陪仲塗

うき涙しのぶに心ありの穴つゝみがきれて袖をもるやど

顯戀　加保茶元成

わくらばに身はゞはあへど戀衣二度ときもせであらはれにけり

隔壁聞戀　鶴羽重

垣のめも忍びて君がことの葉をへだてゝ壁の耳にのみ聞く　濱邊黑人

祈戀

ひきときのうらなく思ふ心よりあはせてたべと神せがむなり　四方赤良

かしは手のなるかならぬか一向に口をむすぶの神ぞつれなき　佐倉はね炭

不逢戀

待ちわびてはなをあかせる寒き夜は齒のねもあはぬ君ぞつれなき　千枝有竹

待つよりもわかるゝよりもかなしきはあはでぞかへる九十くよ〳〵　網破損はりがね

寄挑灯不逢戀

君にあふ手づるもきれてうき年をふる挑灯のはりあひもなし　棹鹿卷筆

待戀



これほどにまつといひたやかんざしのしやんと疊へたつたひと言　加陪仲ぬり

待不來戀

ときにして待つ夜は側に置巨燵ひともこねこの丸寐せよとや　丹青齋

寄虱待戀

思ひつめてかくばかりなる玉章に夜はしらみても猶またれける　千枝有たけ

逢戀

まれにあふ戀としりなば曉のとりもからすも寐わすれてくれ　ちゝのみ滿門

深更逢戀

宵の間はあたりとなりもこはめしのふけてと契る夜半の嬉しさ　鎌倉遠則

茶屋逢戀

藪入のたび〳〵茶屋であふ戀にのぼりつめたる箱ばしご哉　腮長馬つら

めぐり來てあふ日の首尾もよしず張よそからさゝぬ水茶屋の中　手柄岡持

穴藏逢戀

穴ぐらを緣のはしごのおり〳〵はまへはだふれて水ももらさず　峯松風

忍びあふ中はたがひにあか土のふかくほれたる穴ぐらの隅　於保久旅人

遇不逢戀

うつり香の殘りて年をふる小袖今は身はどもあはできれぬる　四才赤良

別戀

おさらばとそむけし顏をむき玉子きぬ〳〵糸のきるにきられず　吳竹よほけ

夜發別戀

又こんといひしなはての別霜君が顏にもまだら置きけり　手柄岡もち

後影戀





けさはなほ君がとめきのうつり香に百雙ほどのわが思ひかな

片思

ちぎられぬ物とはいまぞしるこ餅一本箸のかた思ひにて　荏土方證

九十九夜かよひしれんぼれゝつこそれつきとしたるかた思なれ

恨戀

なさけありありと思ひてはまりしは葛のはかまのうらみなりけり　手柄岡もち

旅戀

不自由な旅にしあれば椎の葉にめしもりあげてたのしみぞする　白鯉館卯雲

三味線もひかず調子もあはねどもひとよ旅寐の岡崎の君　鄙野中道

被妨仲人戀

四方赤良

相性もよし野の川の水をさすいもせの山のなかうどぞうき　唐衣橘洲

あひ思ふ中をへだつる仲人はなかだちとこそいふべかりけれ　子子孫彦

むそび置くその仲人のさまたげをきくに心のなきねいり聟　鷹羽番

稚子戀

いとけなき心に思ふまゝごとの末は人目をかくれん坊かな　紀定麿

稚子の思ひつめたるひとつ身になどつけ紐をとかぬ君かな　大屋裏住

早乙女戀

早乙女の思ひかけ樋の水もれて今は歌にもうたはるゝ戀　平生重季保

早乙女の笠の下ひもうちとけてあひみん秋をたのみかけ水　袋筒長

折々にうたもとぎれて早乙女のさゝやきあふは戀の植ゑつけ　秋風女房

しづの女が思ひ山田にぬれそめて穂にあらはるゝ戀の若苗　から衣きつ洲

園者戀

いかにせん象戯のこまとすてられてかこはるゝ身の未もつまらず　藤滿丸

戀人のつげの小櫛も利休形さすが千家のかこひ物好　蓬萊山人歸橋

世の中をわたりに舟のかこはれはなみ〳〵ならぬ戀の深き瀬　武士八十氏

武士戀

ものゝふも人をこい口つかの間もわすれがたなの身ぞすかれぬる　ふし松嫁々

ものゝふのやたけ心のひかるゝはいもが柳のまゆみなりけり　から衣橘洲

後家戀

こと人を思ひにつくるつみ髪やなきつまぐしもさすがわすれて　雲樂齋

奴僕戀

いつとなくよい中ぬきもあしざまにふみつけられてうき草履取　智恵内子

卜者戀

待つ人にあはぬよつらきうらなひ者かん艮こんとふけわたる鐘　吳竹世暮氣

萬歳戀

とくわかきごまんざいしよの妻しあればはるゞきぬる三河戀しき　小川町住

川越戀

約束をたがへず九十五もんまでかよひつめたる川越の戀　夕霧籬

座頭戀

らうたしと見る目もかねてあらざればせめてうき名をたてゝきかなん　鳥空音

互聾戀

忍びあふ中はたがひの耳と口きこえませぬと恨をやいふ　望月章甫

戀病服藥

きくやいかにうはの空なる風藥まつ夜つもりし戀の病に　書出田丸

宵口舌

もつれたる宵の口舌もみす紙をへいでとりたる閨のむつ言　家にあそび召して夜ひとよ酒のみけるにさりにし世すみける人の俤にいとようかよひにみえけ

ればすゞろにむしかを思ひいでて　婆阿

夢の中に夢をむすぶの神ぞともみよかしは手のうつゝなのよや

あざみをゑがきし扇のうらに書きつけて人のも

とにつかはしける　清水立登麿

なさけなき人の心は鬼あざみ言の葉末にもつやとげ針

淺草寺の庭にみめもあしからぬ葭簾張のなには

やてふ茶屋の女を見て歌よめと人のいひければ　唐衣橘洲

なには屋の女はよしと夕時雨ふるともぬれてみたき笠松



# 徳和歌後萬載集　巻第九

## 戀歌下

寄雪戀　童部友竹

とけ〳〵とつもる思ひを今宵しもいはまの雪のふるへ聲なり

寄稲妻戀　朱樂かん江

しばらくも夜どこにしりをすゑざるはわが妻ならぬ稲妻ぞかし

寄雷戀　吳竹世艶

稲妻のちらとみそめし君ゆゑに心もうはの空になる神

大石小石躬陰

なりさうで我つまならぬいな妻の光かゞやくよそのかみなり

寄初午戀　普栗釣方

ひとすちにいなりともいへ戀の山のぼりそめしはけふが初午　子子孫彦

寄文月戀

はやあきもきたかと思ふ戀風にくりかへしみる君の文月　七轉八興

わが緣のあつき夏毛の筆きれて心ばかりは通ふふみつき　袋町入隅

寄路戀

ぬかるまいと思ひながらもふみこめば足のぬけぬが戀路なるらん　峯松風

寄橋戀

それとのみ言葉のはしはかけつれどいつかわたしが思ひはれなん　山手白人

寄樋竹戀

思ひあふ中はふしなき樋竹のながくも軒の妻と見るべき　大事三味

寄階子戀



ふみ見れば今宵こいとのうれしさにしのびて足をはこばしご哉　山手白人

寄簾戀

簾越見かぢる猫にかしは木のえもんつくらふ前わたりかな　糟句齊余丹坊

寄屏風戀

うき涙ふるき屏風の蝶つがひはなれ〳〵になるぞ悲しき　もとの木あみ

寄襖戀

人心あさき敷居にせかれてはわれから紙もあけていはれず　山手白人

寄寶戀

うちとけて誰とふすまか知らねどもいもが袂のひきておほさよ　四方赤良

箱入の娘のとしはいくつぞと隣の寶かぞへてや見ん　鶴籠女

いつ人の手に入聟をとるやらとたれも思ひをかくる子寶　峯松風

寄玉戀

思ひあふ中はかどなくまろ〳〵と小いさかひさへたまのことなり　紀定麿

寄錢戀

ひとすぢに思ひかさねしみとせんとつきつけいふはさしも恥かし　腮かきかね

寄琴戀

戀人に今日はそひ寐の枕糸みをひきしむることぞわりなき　加保茶元成

寄碁戀

きみとわが心はいづれたがひせんはねかへされて手もなかりけり　書出田丸

つながりし中を今さらきられては二世とかけ目もだめとこそなれ　望月まん丸

寄筆戀



うき人を見そめて年をふる筆の命毛かけてかきくどかばや　銀杏滿門

寄硯戀

いは硯海よりふかく思ふぞよかほは赤間のせきのへだてに　吹売咽人

寄硯箱戀

うき名のみ高島石のあひがたきねがひを神にかけ硯箱　見龍

寄弓戀

手ぐすねをひけど人目の重籐ははなすまゆみもなきぞくるしき　吳竹節躬

寄鐵炮戀

たまさかの音づれとてもうち絶えてうらみのたねが島とこそなれ　如水上毛

玉の緒もたゆる思ひのたねが島さがなき口に火ぶたなければ　紀躬鹿

ふさがりし胸の火ぶたもきれやらで涙の玉はうちにこもれり　紀定麿

寄刀戀

やつれては心ほそみのみだれ燒ひとりねたばのあはぬ夜ぞうき　書出田丸

君ゆゑに心もうはのそら鞘はさすが人目のしのぎがたなや　吾足齋灌園

寄鞘戀

身をいれてくどけどかたい後家鞘はたゞいつまでもあふ事ぞなき　吳竹よつや

寄鑓印戀

ちら〳〵と見しは思ひもますら男のもたせぶりなる鑓じるしかも　婆阿

寄具足戀

いつまでもいはで忍ぶの草ずりにもゆる思ひは胸のひをどし　腮かき金





やう〳〵と今宵の手管具足していまやと君を待ちうけの筒　いつも早秋

寄車戀

くどいても人の心やうし車戀の重荷をつけつまはしつ　秋風女房

うきいのちしばしはよどの水車思ひをくみてめぐりきよかし　やはり棟梁

小車のひく手あまたの君ゆゑに戀の重荷をはこぶ身もうし　山手白人

寄傘戀

ろく〳〵にいらへだにせずからかさのさしもつれなき人心かな　四方赤良

傘のえにしはあれな年月をふるほねかひの手にわたるとも　澤邊帆足

寄笠戀

笠のひもむすぶの神をあてなればとけぬ契の末かけて待つ　百足こがね

寄扇戀

かはらじとちぎりをこめし要とて今宵あふぎの折もたがはず　大原ざこね

寄團扇戀

うたがひし胸のうちわのはれてよりはなれはせじと思ふ姫のり　高山笑翁

寄小鼓戀

うらはりのはなれぬ戀の中なれどあはねば心おきつゞみかな　山手白人

色ふかき思ひのしらべかけ初めてつゞみもつ手もしめつゆるめつ　四方赤良

寄三線戀

色糸のねをにむすぶのかみこまをかけてもうきは何のばちかは　ちゝのみ滿門

寄薫物戀

たきもののひとりこがるゝ戀やせにたふれふせごぞ骨ばかりなる　柿下手丸

寄椀戀

末のかさかけてちぎれる中かさと親椀たちもかねてしる椀　忍岡虚路里

寄鍋戀

よし君がうそをつくまの鍋ならばわれとぢぶたとなりてあはなん　山手白人

寄水桶戀

水桶のもらさぬ中もたがきれてそこらうき名をながしもとかな　柿下手丸

寄茶碗戀

うちわりていはれぬたけのつゝ茶碗あけくれ物を思ひそめつけ　腮長馬貫

寄油皿戀

かさなりてくらき思ひをした皿にとかく油の君がまはり氣　雲樂齋

寄灯心戀

筆にさへかきたてられぬ燈心の戀にこがれて身もやせ男　濱邊黑人

寄雪踏戀

あつ革なせつたのうらのかねごともふみたがへてはひぞるばかりに　眞竹深藪

寄下駄戀

下駄のはもたゝぬほどなりわかれ路の涙の雨のふりかゝるには　醫者小路匕影

寄十露盤戀

よしさらば命にかけてそろばんの玉きはるともあはざらめやは　紀定磨

君をのみ思ひまゐらせそろばんのたまさかにあふ中ぞわりなき　猩々變生

十露盤のたま〳〵よればはじかれてあはぬほど猶思ひかけ算　唐衣橘洲

寄赤本戀





四天王ならねば戀の山入に忍ぶ心の鬼はおそろし　野見秋足

寄羽織紐戀

むすびおくちぎりはほそくうち過ぎてあはぬ羽織のひもたちにけり　紀みじか

寄俵戀

君にわれ思ひをこめのきれしより面やせにける化粧ごもかな　大飯食人

寄米戀

もろともに米つむまでとちぎりてし思ひますめのいねもやられず　柳直成上毛

寄酒戀

とつくりとかたるあひだもなつの夜にはやさんずるのとりぞなくなる　多田人成

寄醴戀

あまざけのすくなるほどになれそめし二人が中はかたづくりかも　問屋酒船

寄中汲酒戀

うすからす思ひあひたる中くみは菰かぶるとも心からくち　大屋裏住

寄茶戀

うき事をかたるは今かはつむかしのちむかしまで別義あらじな　垢染衣紋

寄焼飯戀

あはれともいふ人はなしあぶりこの身はやきいひにむねぞこがるゝ　大根太木

寄冷食戀

朝夕にちぎるとすれど似菩薩の一夜へだてばすゑかはるらし　裏堀蟹子丸

寄牡丹餅戀

牡丹餅の味も心もかはらじとちぎれどへだつ堺重箱　卜柳

寄田樂豆腐戀

やる文のかへしもせねば田樂のくし〳〵むねをこがす我みそ　大原久知ゐ

寄梅干戀



梅干のすいはみをくふならひとてたえぬ思ひのたねばかりなり　秋風女房

寄牡丹戀

あひ思ふ二人が中もこく牡丹うしとはいはじいろ深見草　人世話成

寄蓮戀

それとなく戀の糸ひく心ねをほりてきくのも蓮葉なりけり　丹青齋

寄百合戀

ゆりおこしゆりおこしてもうつぶきて花の顔ばせみせぬ床の間　手柄岡持

寄長薯蕷戀

あしびきの山に生ふてふ長いものながくもいもにあはでやまめや　四方赤良

寄眞桑瓜戀

あはまくは瓜のはたけに寐もしなんとりつる履のうき名たつとも　槽句齋よたん坊

寄藤戀

こい中もうす紫の藤の花さくといふさへきにかゝりつる
寄栗戀　はし鷹身寄

しぶ〳〵ないらへながらにうつぶくはまだうたぐりのき娘ぞかし
寄竹戀　大井武卿

此君とひとよ寐ぶしのさゞめ言思ひのたけもわりていはゞや
寄筍戀　よしのゝ葛子

人目をもいくへかつゝむ竹の子のふしのまに〳〵心こめつゝ
思ふたけのこるはなしのみじか夜にねほりはほりは深い戀中
寄武士戀　柳すくなり

弓とりのゐるやくそくを引きつるははなれて後にあはじとや思ふ
寄鍛冶戀　常産阿馬

皆人和良布





をさふねのなみ〳〵ならぬかぢとりて人目の關をうちも越えなん
寄大工戀　絲瓜皮也

くる〳〵と巻きをさめたる墨壺のいともうれしき君が玉章
墨つぼのいと一筋に思へどもうらむぞ君がまがりがねなる
寄仕立屋戀　澤邊横行

きぬ〴〵も立ちわかれぬふ目の針にいとしきみをばさしつもれかし
寄商人戀　猿萬里大夫

思ひねにあはぬうらみを書出しのふみつけられて猶もこふらし
寄乞食戀　便々館湖鯉鮒

日に千たび門にもたゝんわが戀路どうぞかなへて下さいやしやう
寄手習戀　普栗釣方

常産阿馬

今日よりや思ひまゐらせそろ〳〵とうきみの紙に戀の手習　峯松風

咲きそめし花のいろはも戀風にちりけもとからぞつとするすみ　車井多久類

いろはより手をとり初めてをしふれば紅葉ちりぬるお若衆の顔　朝起つらき

寄蹴鞠戀

あふ事もありや〳〵とまちけるにさら〳〵とんと君のそれまり　海老船守

寄踊戀

盆々とちぎるにむねも踊子のあひみん事はけふあすばかり　山道高彦

寄花火戀

むすぶべき縁のつな火の折を得てあふは雨夜の星くだりかも　鎌倉遠則

寄馬戀

馬にのる身にも戀路はかちはだしとりもつ人を力草かな　加保茶元成

寄猿戀

つれなさに思ひはなほもまさるなりひつかきおくる言の葉もがな　内匠半四ら

寄象戀

つゝめども女の髪につながれて心のたけをみんなはく象　門限面倒

寄鯛戀

色香にはあらはれねどもなまだひのちと御座つたと見ゆる目のうち　和歌も少々讀安

寄子戀

椀箱にねずみの入りし心地してくるしき戀はねつかれもせず　藤葉な丸

寄丑戀

わが戀はかの老人の牛ならでりんきの角をひけらかさるゝ　榎雨露住

寄寅戀

つれなさよ風のたよりにいひよれどはりこのとらのかぶりのみして　三方長熨斗

寄卯戀

つらさうさうさぎの耳のなが文をかきちらしてやきりゝ命毛　藤葉奈丸

寄辰戀

今ははやうき名もたつの天上にのぼりつめたるわが戀路かな　扇折風

寄巳戀

くちなはの二筋となき心にてもつれあひたる戀とこそなれ　三方長のし

寄午戀

夢にさへ君が心ははなれ馬うしを見し夜ぞ今は戀しき　藤葉奈丸

寄未戀

ひつじにはあらねど君が玉章のくひさき紙はくひたくも有り　ひまのないし

寄申戀

まざ〳〵とうそばつかりをいひなさるしりもむすばぬ君が言の葉　和歌も少ゝ讀安

寄酉戀

まちわびてさつそくはづすかけがねはとりのそらねもいらぬ閨の戸

寄戌戀

棒ならで今宵は君にあふ夜なりねせはしやせぬさあおきな丸　園蝴蝶

寄亥戀

ゐのしゝのふり向きがたき戀路かなたとへ命を牙にかけても　すは子

寄猫戀

垣ほよりすがたをちらとみけ猫のまたたび〳〵に思ひみだるゝ

# 徳和歌後萬載集　卷第十

## 雑歌上

いとよう空はれわたれる夕富士のねを見やりて

「白扇倒懸東海天」といへるからうたを思ひ出でて　朱樂漢江

白扇をさかさにかけし山はいまつまこがしたる煙たつなり

日ぐらしの里本行寺に物見塚とてこだかき所あり筑波山人のかきたるいしぶみ立てりこの寺の庭よりつくば山もよくはれわたりて見えければ　婆阿

物見塚むかしたづねてふみ見れば右と左につくば山人　紀定麿

隅田川

一ぱいに硯の海をひき出してすりながしたるすみ田川かな





きさらぎ十日あまり二日四方赤良あけら漢江に

いざなはれてすみだ川に舟遊しけるに折しも月おぼろに空のけしきもたぐならねば人々歌よみきようじけるついでに　銀杏滿門

船頭はなくとも舟は波の上をどうかこうかといさり火の影　平秩東作

樓臨三絃江といふことを

玉琴にをさめし國のためしをもひく三味線のほりの高殿　今村寄樂齋

下總のくに小金原を過ぐるとて

名にしおはゞかしてくれかしこがね原末になすのゝ果は見えねど

八代にいたるとて火川といふ所にてひうち石ひらうて　横道黑塗師

ひのもとの肥後の火川のひうち石ひゞにひとふたひらふひとぐ

一谷　　腮長馬貫

一しきりたゆみて又もあつもりの末は露けき月のくまがへ

狐渡諏訪湖といふ事を　　内匠はしら

氷りてはゆきつきつねのおのづからすはうち連れてわたる湖水ぞ

みな人は神のをしへをすはこそと氷はるかにわたる水うみ　　常産阿馬

名所博奕　　智恵内子

かつ事はとほつあふみのまけばくちもとでもいなさ細江なるべし

名所生醉　　堂伴白主

白波のたつもよろ〳〵生醉の顔はあかしのうら千鳥足

庭苔　　夕霧籬

人とはぬ庭もわが身もあかづきて苔むしけりなものくさの庵

苔埋古墳　　匕常持

年ふれば石のはだへもさぶきにや苔の衣をくるみてぞ居る

辻番栽松　　へつゝ東作

辻番が下座のかた手の作り松日に十かへりもはひつはせつ

題しらず　　傘勝守尾張

なげてしるこのかはらけの音なきに麥のはたけの地にみつるとは

山家　　石部金吉

鐵炮のかくれずみなる山里にたま〳〵人もねらひ來るなり

放屁百首歌の中に　　四方赤良

山ざとにしりごみしつゝ入りしよりうき世の事は屁とも思はず

山家獸　　いつも早秋

音づるゝ物は狸のはらづつみちつとも人のとはぬ山里

閑居燈　銀杏滿門

世をすつる心もほそきともし火に物おもはする吉丁子かな

しのばずの池のほとりなる山田景富のやどりを　四方赤良

とひ侍りしに風景いはんかたなければ

垣ごしにむかふが岡の景色をもわが物がほとしのばずの池

述懷　手柄岡持

金なきと隙のなきとにかへてまし病ある身と苦勞ある身を

としぐに目もよわりゆきはもかくるふるのこぎりのひきてなき身は　加陪仲塗

われが身も三十にしてたつか弓やたけ心にまとふたど中　清水立登麿

嘯月齋鴉山（美濃神戸）





塞翁がうまい事ならいつとても跡からうしが來ると思へや　四方赤良

世の中の人には時の狂歌師とよばるゝ名こそをかしかりけれ

老述懷　志月菴素庭

老のみとなるこの瓜の今ははや婆でなければ齒にあはぬなり

鐘撞述懷　眞竹深藪

ひとつづつつくまにつくやためいきの身はすてがねとかねて思へど

鑓持述懷　問屋酒船

このまゝにいつまで年をふる鑓とわづかとり毛の身をかこつなり

寄菊述懷　山道高ひこ

行秋とあすしら菊の露の身のうきは涙にひたし物なり

寄屏風述懷　から衣橘洲

世にたつはくるしかりけり腰屏風まがりなりには折かゞめども　糟句齋余丹坊

寄浴衣述懐

雑巾となるみざらしの古ゆかた又しほられてくちやはてなん

春のはじめ何がしのもとをあるじとし侍りて　さくらはね炭

こゝに一夜かしこに一夜笹鳴の身はうぐひすと飛びありくなる　引わり御膳

題しらず

ふき自在ならぬ女子の身の上に男みやうがのあらせ給へや

四十にちかきとし前歯の一つ落ちはべりければ　馬屋まや輔

青かりしあたまもいつか村紅葉ひとはちり行く身の秋ぞうき

世のいとなみのしげきによりてこのめるあそび

も遠ざかりけるに

なみならぬ用事のたんとよせくれば釣にゆくまもあらいそがしや　加保茶元成





昔よりわがすむところは水難の沙汰なかりしに

天明三年文月の頃大水出でて家居もながれ侍り　嘯月齋鴉山

けれども

はなしにもきかぬ寐みゝに水入りて戸口に舟のかゝるためしは

不破の月見んと約束せしもことしの水難にて無

下になりけるがその日になりて友のさそひ來に

ければ

水難にしづむ心もつい月にうかれてふはと出かけこそすれ　山手白人

武士貧乏

貧すれば質におくのて太刀かたなさすがは武士のうけつ流しつ

炭團うるもののまづしきを見て　大原久ちゐ

借錢をまろめかねてや炭團屋が身をけしずみの粉にはたらくらん

老女懐舊　宿屋めし盛

いつのまにみどりの髪も雪つみて柳ごしさへかくかどみぬる

思ひ出づる嫁入の時の丸綿も今はしらがの雪とふる婆　紀定麿

遣手婆懐舊　小川町住

俤のかはりて年もつもる身は名のみやりてのはなをとる婆　紀定麿

駒下駄にいさみしわれも今ははや遣手の婆のらちくちもなし

まらうどのまうけにさかな調じけるとき　大飯食人

水すまばまづ赤えひをあらふべしにごらば鮹の足をあらはん

盃の蒔繪を見侍りて　人世話成

さかづきのうらは蒔繪の鳥なればおさへる人もさす人もあり



菊印の酒を人のもとにおくるとて　猿萬里大夫

あくるたびどく〳〵と音あれど藥ときくの酒印かな

やごとなき方より月をゑがきし船のかたちした

る盃をたまはりければ　仲吉子よし

君は舟しんもろはくを引きうけてのまばや水にうかぶさかづき

題しらず　風前雲助　縣升見

一年は酒にひたりて過してきこの世はさめて夢にぞありける

雀酒盛　置石村路

もとよりも雀はさゝがすきなればゑさしの竿にさいつさゝれつ

久しくあはざりける山田氏にいなだといへる肴

にて酒すゝむるとて　武士八十氏

今もつて酒はやまだのをろちなら出す肴もいなだ姫ぞや

ぐそくびらきの日紀定麿來りければ　酒上不埒

五十歩も百歩も同じ足もとのよろりよろひと醉ひ給へかし　紀定麿

返し

むだ口は何のやくにもたゝかひをもつてたゝれぬほどに醉ひけり

人のもとへ酒さかなをおくるとて　可笑

初秋の風もふくらにおね酒の口にあはびのかひあらまほし

伊豫守何がしのもとにてはたしろといへる魚を　山手白人

味噌吸物にして出しければ

これも又いよのゆげたの馳走とてとをはたしろのみそになりけり　もとの木あみ

生醉音樂

ひちりきの舌もまはらず大酒にうどのゝあしもたらぬ生醉

何がしのとのゝ所にかつをのさしみを送るとて　平生三里季保

ごばん所へうつてかはつた進物をかうでかつをのさしみとも見よ　栗成笑

醬　滓

山にもる醬油のみこそかなしけれ秋はてぬればくふ人もなし　養父坂押躬

鮎の鮓をたうべて

千金にかへじと思ふあゆの鮓これもかはせにのぼり下れば　鵜柄仙口

奈良漬

ならづけはならにかぎらずいづくでもかすがあるからならづけといふ　瓢から酒

米のあたへたふとき比

花よりは團子ちいさく見えにけり小米ざくらもあたへ千金　董菴退二美濃

なりはひあしきとし粥の攝待するを見侍りて

貧民のうゑたる腹へほどこしのかゆい所へ手のとゞく慈悲　雀酒盛

棚上牡餅丹餅

牡丹餅をたなにあげはの蝶もこんかけしきなこは菜の花の色
むさしの國一の宮の池よりぬなはをとりておく
かすく齋余丹坊
られける人に
たべつけぬ生じゆんさいをみたらしやこれぞむさしの一のおみやげ
竹杖爲輕
詩人嗜餅
酒一斗のみにし人も物かはとかみこなしたる餅は太白
丹青齋
隣より黍團子をもらひて
下さるは日本一の黍團子ひとつついたるおともいたした
智恵内子のもとへ大和柿にそへてよみてつかは
しける
吉野葛子
よみならふ歌のたねにとへたながら心ばかりをかきおくるなり
返し
智恵ないし





たまはるは御所にも似たり言の葉の花もみもある枝がきのもと
澁柿をとりてあまほしにしけるが天氣あしくて
不出來なるを人にすゝむるとて
古屋雨漏
あまほしにすれば天氣もかきくもるしぶ〳〵ながらあがり給へや
すみだ川のほとり牛島といふ所に中田屋といへ
る酒家ありみな人これを葛西太郎と呼ぶいけす
の鯉に名あり
平秩東作
庖丁がとく牛島のあらひ鯉かいしく芦のはさへこほれず
歌舞妓工 中村重助
川風に鬢そゝけたる人ばかりあらうて食ふは鯉のひやもの
四方赤良
ふたつもじ牛の御前のむかふ島太郎が鯉はいけの中田屋

淺草の酒家うかむ瀬といへるたかどのにて鮑の
貝の大なる盃にて酒すゝめければ
生醉とわらはどわらへ味酒のみをすててこそうかむ瀬の貝　多田人成
うかむ瀬のたかどのにて酒のみけるに人々庭に
おりたらて蹴鞠せしにまりのそれて川の中に落
ちければ
うかむ瀬にしづめるまりもすみだ川ありやなしやと船頭に問ふ
友だちひとりふたり目黒に詣でけるにそのとも
ひとりは上戸ひとりは下戸になんありける折か
ら雨ふりければ
村雨のさめるもあれば醉ふもありこれやめぐろのふどうなるらん　泥道すべる
鳶の油揚豆腐をさらひ行くをみ侍りて　富家來富有



鳶とんで天にいたりし油揚はときにとつての僧のめいわく
ほしなを見侍りて　生儘成
いたづらにわが身は干葉の年をへてむかしの若菜今はこひしき

# 徳和歌後萬載集　巻第十一

## 雑歌中

九十六になりける人によみてつかはしける　吾足齋灌園

おあしさへ達者でしかも錢百のとしにすこしも不足ござらぬ

浮腫をやめる時消息してとはれし人にこたへ侍る　手柄岡持

わがやまひとひ給はればすら〳〵と水もながるゝ心地こそすれ

目をやめる人をみ侍りて　便々館湖鯉鮒

うば玉のやみ目は空に知られねどかた〳〵はほしかた〳〵は雲

女子の疱瘡を見侍りて　節藁中貫

はら〳〵と四乳の様な疱瘡はかせかけるほどさてもよくなる





孫の疱瘡を見侍りて　車屋義人

疱瘡をするがのふじの山たかくけふみづうみのはじめなりけり

連歌をこのめる人痢病をやみけるに　紀定麿

連歌師のさりきらひなくくひし物うちこしてより痢病とやなる

人のはやり風ひけると聞きて　問屋酒船

引風の邪鬼追ひはらふしやうきさんたゞ一服でげん宗の夢

風を引きて咳のいでければ　堂伴白主

水ばなのちるともよしやよしの川しがらみかけてせきとゞめなん

やまひののちしばらく酒をやめ侍りければ　峯松風

下戸となる我身ひとつをなげくなりふたつみつよついつかのみたや

盲人針治　勘定疎人

世のやみをさぐり〳〵て針たての心ほそくもうちくらすかや

癪をやめる人に針うちてやるにつれなくもなほらねば　から衣橘洲

うち侘びて今はせんかたつくば山にひはりいしのまねはすれども　澤邊帆足

灸をすうる人を見侍りて

すゑやうとやうやく思ひきりもぐさこれがきかいで何としやうもん　四方赤良

癪病をうれへ侍りける時

思ひきやわがしやくせんのしやくならでわきしやうもんにこはるべしとは　阿久垂柏

夕立嫁入

夕立にあふ嫁入の行列はつぎ〳〵までもぬれの相伴　酒上不埒（繼川春町）

喜三二のなかだちにて妻をむかへければ

婚禮も作者の世話で出來ぬるはこれ草本のえにしなるらん　山手白人

ある人の嫁にはじめてあひ侍りて

花よめごとくみよし野と思ひしにお目にかゝるはけふがおはつ瀬　八十氏人

狐嫁入

よるのとの嫁御はいつかこん〳〵とまてば甘露のひでり雨かな　京間内則

かづく藻の花よめの顔ながめんと舅もそばへよるの殿さま

女房なき家はとりしまりなきなど人のいひければ　吾足齋灌園

小ぎれいなすまひはならず女房がなければむさいくらしなりけり

生みたまのいはひの日碁をうつ人を見侍りて　仲吉子好

はぬる魚おさべて切つてふた親をいはふがかうのいき身たまかも

圍碁すきける人のもとにて黑くぬりてかけごある枕を出してねぶりをすゝめけるに　津無坊早耳

うば玉の夜を黒石になずらへてかしかけごの枕うちもこそぬれ　加保茶元成

双陸にまけぬれば

双六をうつの山べのうつゝにも夢にもひとつ勝たぬなりけり

みやこに侍りし頃烏石山人のもとにて阿野卿の

御書あそばさるゝを見奉りて　世入道へまうし

水ぐきの御跡におそれ夏ながらぞつとするほどかんじ入りけり　勘定疎人

夜業

よなべかと問へどこたへもないぎかや口にたまりしうむのあいさつ　一升夢輔

川向喧嘩

はてしなき水かけ論の川むかひわたりもつかではらをたつ波　山手白人

碁によせて喧嘩の中なほりの心をよめる　唐衣橘洲

生死の論はむやくと打ちかへてなほる中手の圍碁はむつまし

邪許歌を聞きて　武士八十氏

力をも入れずして待つ手ぢかくのつちを動すきやり歌かな　野見秋足

居ねぶりする人を見て

居ねぶりの船こぎ出すうみづらはいく朝はやくおきつしら波　山手白人

咄上手聞上手といふ諺を

お上手のはなしすゝめもかひぞなき身は聞下手のしかも籠耳　銀杏滿門

傾城無筆

思はずよ世にうかれ女の八文字その駒下駄もふみかゝぬとは　竹杖すがる

傾城博奕

ふせるのはよきめと思ふつぼざらをふりてあはざるはりのつよさよ　平秩東作

ある人主人の命にて能の太刀をつくりてあげし

と聞きて

御細工のしてがよければ脇にさす太刀も一ふりある男舞
　無法者ぬす人にあふといふ事を　寐小辨垂高
無法者おのがやじりはきられたりとるにかひなき運のつき弓
　ふとゐと河骨を生花にせんとて轡どめにいけか　一本鎗主
　ぬる人を見侍りて
口ごはきふとゐはつなのくつはどめかう骨折つて居るもいけずき
　米のあたへ貴き頃市のほとりを過ぎ侍りて　紫由加理
帆をあげし米のあたへは高砂のこのうら店によくも住の江
　菊畑にませ垣したるかたはらに下部のしゃする
　を見侍りて　手柄岡持
牡丹なら名にめでしとも見ゆるさめ菊のまがきにしゃはいかにぞ
　文月六日人のもとより竹をおくらんとありしに

くれ竹ときけばこなたはほし合の空時宜なしにもらひ申さん
　神無月の比ある人のもとへ美濃紙をこひにつかはすとて
ふる筆の笠はあれどもかみな月時雨をふせぐみのを賜はれ
　何がしの大守下著にもろ人の狂歌をかゃしめて
狂歌衣と名づけ給ひしにその衣のそびらに花信
　齋が筆して猿をかきたるを見て　四方赤良
誹諧の猿の小簑もこの頃は狂歌衣をほしげなりけり
　雨のあしたすて子を見侍りて
子をすつるやぶしもわかぬくらき夜に涙の雨やしのをつき弓
　雨夜百物語　出諏訪耳彦
ばけものの話はたつた一筋の燈心さへもけしからぬ雨

やんごとなき方に久しうてま見え侍りしにわが
老いさらぼへる様をあはれみ給ひてまことに麒
麟も老いぬればと宣ひし時　白鯉館卯雲

わたくしに麒麟の事はあらざりき駑馬におとるはわかいうちから

大屋うら住のやどりちかければ日ごとにとひ侍
りて　腹から秋人

たはれたる和歌のうら住ちかければあし間を見てはたづねこそすれ

やはらの師にわぶることありてひたすらいひも
のすれど心とけ侍らねばいかにやはらぐべきわ
びうたをと人のもとめに　から衣橘洲

ものゝふの心やはらもしらぬ身は手もなくかゞむ腰折の歌

放蕩なる男子のもとへ　拙堂法師





福徳の寶と思へのらむすこいつも親父にもらふ目の玉

わが持たる簑龜を見る人多ければ　風來山人

天が下名をふることのしるしには多くの人の來てはみの龜

ひとのすぎはひといへることを　檜皮釘武

ほそくともかりのうき世をすぎ楊枝おく齒に物のかゝる苦はなし

雨の夜峯松風のもとにて　讀人志禮多

源氏にはあらぬ雨夜の物語六十帖もこの四疊半

ある人淺草海苔をほそくたちてやき酒のさかな
にとていだしければ　久壽根兼滿

たゞのりを短册なりにやかれしはむかしながらの山ざくら炭

東牛齋にて布留糸道のさみせんにあはせて誌仲
といへる翁源平つはもの揃蓮生道行の段をかた

りけるに橘大夫の舞ひければ　四方赤良

蓮生の道ゆきがかりとりあへずうたふも舞ふもつはもの揃

返し　橘大夫元家 九代目市村羽左衛門

はじめての連中さまに蓮生の道行きがかりさても迷惑

きさらぎの頃山道高彦とぶらひ來ませしかば　澤邊あや子 芳澤菖蒲

ざれ歌に聞きつたふ名は高ひこの君もはじめてきさらぎの頃

返し　山道高彦

諸人のひくや地藝もよし澤のあやめにはつのげんざん位なり

題しらず　三方長のし

針ほどな事に棒つく足輕は重きやしきの武士の金鐵

四方赤良と共に日ぐらしの里にあそび侍りてか

はらけを谷へなげて興じ侍りける時　一本館主

かはらけの落つる所もかすかなるその日ぐらしの茶屋のあきなひ

花道つらねが木場のやどりを訪ひ侍りしに門に

二もとの松の立てるを見て　四方赤良

はるゞ〳〵とたづねてき場のかくれ家は杉にはあらぬ松たてる門

日ぐらしの里にて　日影土龍

今日はけふ明日はあすかの山ちかきその日ぐらしに遊ぶこそよき

題しらず　長々浪人

さぶらひのかどみと人のいふなれば我もうらやにかどみてぞすむ

花道つらね

おほけなく柿の素袍におほふかな我がたつ芝居みやうがあらせ給へや

# 徳和歌後萬載集　巻第十二

## 雑歌下

老子　四方赤良

桃栗は三年柿は八年の中にすもゝは八十年の春

荘子

荘周も猫に追はれてうなされん蝴蝶となりし春の日の夢

列子

追風にのりゆく時は道中のくものあしよりはやき駕舁

唐堯

おふたりの娘にひとり聟養子土階三尺こぬか三合

伯牙　賈夕　美濃神戸





もう聞きてあらじと思ひきりの木はことわりぞかし〳〵　四方赤良

鐘子期にわかれし時のおみくじは琴をかついで山や過ぎけん

陶淵明

世のうさを柳にやらでませがきのきくとひとしくかへんなんいざ

褒姒

おめかけの屋かたで風をきる頃は船のほゝゑむ花火見物

楊貴妃

空だきの沈香亭の全盛もあはれ馬嵬が原のひとつ屁

赤壁

文月の文もやかよふ神無月うらをかへして遊ぶ赤壁

函谷關

にはとりの宵鳴もほど過ぎし頃棒ちぎり木でせきに關守　阿那可師古

范蠡遊五湖

功名をとげしもぬけのから衣きまゝにあそぶ五湖のつり舟　臍穴主

米搗

晝間より夜をこめつきや歸るらん朧のかげを庭にのこして　紀定麿

車引

身代はまはりかねたる車引つらきうき世をおしわたれども　峯松風

猿引

三本のたらぬけものもおろかなるわれにましらの藝はもちけり　大石小石躬陰

臼目切

何してもひき臼藝のまにあひはめきり〳〵とはかどらぬなり　友垣古文

布袋の湯あみする繪に

布ぶくろ垢落さんと湯あみして豆のから子もつかふなるべし　唐衣橘洲

壽老人笛をふくかたかきたるに

たをやめのあしたならねど壽老人ふくによりくる鹿笛の聲　四方赤良

韃靼人のかたかきたるに

中華とはいへども花は夏の夜のひとよにかはる罌粟坊主かな

太刀うばひとかいへる能狂言のさまを福王何が

しがゑがきしかたはらに　あけらかん江

つかのまに太刀やうばはれ太郎冠者さしづめおのが目釘ぬかれて

萬象亭のあるじ竹杖爲輕のもとめによりて藤花

かづきたる女をかきたる大津繪の扇に　一河齋鈍通與三兵衛

たれ人のゆかりの花のすがたぞや今も大津に年をふりそで

雨やどりの繪に　白鯉館卯雲

むら雨のやがてはるゝとしりながらやどる心やひさしかるらん　驪山人東阿

よしのの山の絵に

よしのわん雲のはしゞかゝれるは自然と咲きし花漆かも　四方赤良

むかしたれかゝる狂歌のたねを蒔きてよしのの花もらりになしけん　權宗匠梅堂

金魚をかける扇に

きらゞと天地金魚のひらめくはみてもすゞしきおせんする哉　袋筒長

虎をかきたる扇に

これも又扇のほねの竹にすむとらのゑなれば風やおこらん　何がし大守のもとにて江戸大夫河東が扇にかき

てつかはしけるその扇の絵竹に雀になんありける　四方赤良

くみかはす銚子のさゝにからまりて醉をすゝめの時を江戸節　大屋裏住

杜若のゑのつたなきを見侍りて

ぬす人にゆかりの色かこんな絵をかきつばたとはふといやつはし　朱樂漢江

巖にうみほうづきつけたるかたかきたるに

沖津風うみほうづきをふくからに自然とあはのなるとこそきけ　阿那可師古わがすがたをゑがかしめて歌をこひ

ければ

鏡にて見しりごしなるわがすがたお目にかゝるもひさしぶりなり　四方赤良

四方

煩悩はみなみのあたと北面をすてゝあづまの富士見西行　東菊麿

曉

夢にのみひろひしうそのかは財布うき世にかへす曉のかね　田畑持麿下毛栃木

起出づるねみだれ髪の朝ぼらけときあけ櫛にたまるあかつき　ひまのないし

夜明烏

押柄に人の妻戸をあけがらすかゝあ〳〵と呼び渡るかな　大屁股臭

雨ふりの日傘といふ事を

ことわりや長柄もちならふりもせめさりとてはまたひがらかさとは　山手白人

座鋪八景の中に時計晩鐘

たそがれに夜食もちやんとくひしまふ腹の時計や菜はぜんまい　白鯉館卯雲

時計大狂

時計をばあてにはせねどあんまりなことにもよるとひるの間違　銀杏みつかど

關放馬

板びさしもれて月毛のはなれ馬不破の關屋のあれにあれ行く　畠あぜ道



萬載集にたゞ一首いりたる事をなげきて　加保茶元成

とく和歌をよまば集にもれまじを後萬載とはなりにけるかな

萬載集世にひろまりて後萬載集のもとめせちな

ればよろこびのあまりに　板元伊八

まんざいはわれらが家の大夫殿はらづつみうつとく和歌の集

# 徳和歌後萬載集　巻第十三

## 雜體

### 短歌

ひととせ江府の狂言芝居市村竹之丞座に上方より秋田彦四郎といへる道外かたの下りて狂言をあてけると聞きて　笹麿

兩芝居つむ蒸籠の山たかき木戸番の聲
やかましく貴賤群集のとり沙汰はいづれと心
さだめなき時雨ふりおくあづまぢや江戸風はいさ
しらぬひのつくすたはけのかほみせによき評判と
えてに帆をあげてあてたるふきや町市村竹の





上手どもよりあつまれる見物にはめをはづして
こみ馬のあとあしになるやくしやまで尻尾をふつて
はねきれば鼻毛をのばしとんぼうにつられてぞ行く
いくたびか秋田ときけど見あかざりけり

此うた古今我集にみえたり

兩國橋のほとりにてよめる　つむり光

鎗たえぬ兩國ばしをいくめぐりめぐりてみれば
ふじの根もおも白たへにあは雪のふりに呼びこむ
前だれはたれと契らんいくよ餅いまやつくばの
山うりはうそさへつきのくまの膏あぶら蟲てふ
子もり子のあまのみるめのかるわざは鶴のゐひろひ
竹わたりいく千代としをふるでくのあやつり糸の

よるべなき・かたわ車をみせものにする墨流し
いろ〳〵の似顔にしきの川いちにたがこわいろや
うたかたのきえてはともすうば玉火しだり櫻の
よし野丸うらやましげし人しげき茶屋の床机に
こしかたをはなしうなぎやはりがねのみかけはひかる
玉くしげ箱入にして溫石の石川島も
ちかく見ゆらん

反歌

見わたせばあは雪花火橋の月あたへ千萬兩國の景

冬の長うた　問屋酒船

ちはやぶる神も出雲へゆく秋はきのふとすぎの
むらしぐれ僧や法師のけさよりはころも奉加を



せん念の心ねしやかの十夜まへうしろあはせに
ゐの子とてくはれる重のうちは同士こなひこどもが
もちくばりねのこは三かいちのさまさま〳〵ひさぐ
魚の名のえびす講には直や高きいやしきわざも
すみうりのその日〳〵をくれはとりおもしろからずに
うりありき雪にはいとど黑き指十し天一
ひとゝせのめぐり曆をかうがへてみかどへさゝげ
たまみそのひなもみやこも一陽のふくづふくとの
あつものはあたゝかみこのきれ〴〵も出あひがしらの
はちたゝき世を瓢簞にぬらくらとなまづましなる
茶せん髪なでずやありけんたらの魚雪は文字の
つくりどり驚かぬよのすゝはらひあけがたかけて

おく霜の しろきはもちの ことしろの 神田まではや
正月の きぬくばりしつ まつ竹も いとなみたてゝ
岡見するかも

反歌

光陰のやたらはやくもくる春に心そはくとしのせき候

述懐　　鈍奈法師

思ふこと かなはねばこそ うき世とは かねて存じて
居りぬれど やゝそろばんの けたたちがひ 二六時中に
かねほしと まなくひまなく ふじのねの もえつくとはに
思へども もつての外に さぶろくの ゆきや氷に
とぢられて はたらくことも かたをなみ あしずりしつゝ
にしかも 人をうらみん さりながら ふつまりなりし



年のくれ たどかけごひの かほを見て なきぬべらなり
後悔の かへらぬながら くりごとを たゆる時なく
かくなはに 思ひみだれて 勘定の たらぬがちなる
足引の 山した水の にげかくれ 戸棚の中に
ひとり居て あはれくと なげきあまり せんすべなみに
よこにねにけり

反歌

八重葎おほかる宿の冬がれもなどかけごひにさはらざりけん

旋頭歌　　翠流

人の來たりてあない乞ひけれども従者の聞きつ
けざりければ
うちつけにおもてで人の物まうといふ

われそこにきかで居たるは何の耳ぞも　　鈍奈法師

すゝはらひを見侍りて

かの家にすゝはくをのこしかなはきそ
かりつゝも君がきまさんすゝの上ばり

出立のことなるなりのすゝはきを
みる時にこそしらぬ翁にあふ心地すれ

## 混本歌

ある人に酒をふるまひけるにあたゝむるまもま
たでひやにて飲みければ　　穿沙

いれ上戸かんをもまたずひやで飲むくせのわるさよ

## 折句歌

かきつばたといふ五文字を句の上に置きて　　鵜柄仙口

からまでもきこえしものはつの國のはしばの官のたかい關白

## 物名

はなをすり　　はし鷹身寄

かきごしに梅が香かをる春風ははなをすりてや吹き通ふらん
新吉原火えん玉屋のうかれ女しづはたが月見に
しとねのしきぞめせしときしきぞめしづはたく
わえんたまといへる文字をたていれ侍りて　　手柄岡持

折をえてにしきそめなすしづはたの山にくわえん玉の光も

## 草名十

ひともじをあにらいもうとかゝげたてせりあふひまにふきけしなしそ　　利茂

## 菜菓名十

ぎやうとくもせりたてゝなすうたのくわいゆとりのないもおほね口豆　　山手白人

木名十　渡海り花成

すぎしひのきみとぬるてをかざりかやめぐりあふちとまつがはかなし

鳥名十　笹麿

かりのとき山からつどひいづるみはときしやさきのあやうからずや

鳥の名を十かくして戀の歌よめと人のいひけれ
ば籠の鳥になずらへてうかれめの心を　浮鷗

あだごいをしつるのもましこざるひはこうしにほされ猶うかり鳧

魚名十　山手白人

こひしさはいかにますかとふくかぜのなさけきゝたいいなのさゝはら

## 廻文

ある人の放屁しけるをかたへの人わらふあまり
に廻文の歌よめといひければ　加ぼ茶元成

へゝゝゝゝへゝゝゝゝゝゝへゝゝゝゝへゝゝゝゝゝゝへゝゝゝゝゝゝ

# 徳和歌後萬載集　巻第十四

## 釋教歌

子こもりの鹽引を見侍りて　山手白人

鹽引の一尺そんの御子にはばらゝごらこそおはしましけれ

法華の心を　横道黑塗師

この經は無二やく無さんのわれらまで佛になるは一乘の事

達摩　棟上高見

とゝせにはひととせたらぬこゝのとせくがいももはや來年があけ

庭前のかしは餅にやねもしなんあしの一葉の船の小蒲團　四方赤良

高灯籠　算木有政





引上げて讀誦の聲も高灯籠よは過ぐる頃ひとりきえ佛　わらべ友竹

御講參をみて

はかまをばとりて御講へ參るなりねがひこんだる西のかたぎぬ

ある家に葡萄のよくなりたるを見にまかりしに

あるじ同行のよしかたられければ　へつゝ東作

佛道にちかきぶどうのたなごころあはせてたのめ數珠の一ふさ

法師のうかれて歌舞妓役者の聲色をつかひしを

聞きてその法師にかはりてよめる　山手白人

不行儀な出家と人はとがめなようたふもまふものりの聲色

僧の松をつくるを見て　馬場金埒

墨染に思はぬ罪をつくり木の松に五かいをたもたせにけり　北向左武喜

あけくれにつみかさねたる車引身をうしとてや願ふ念佛　堂伴白主

無筆誦經

つの文字もかく事なくてはんにや經よむのはうはのそらおぼえなり　天保川成

隣家誦經

やねとやね谷のとなりに聲はるはうぐひすならでほゝうほけ經　腹から秋人

山寺連歌

連歌してこの山寺におりはしや見わたす景のうら表よき

紫野のほとり酒うる家にやすらひて一休和尚の事など思ひ出侍りて　世入道へまうし

又六が門ごくらくときくからにさかむに佛のいやたふとけれ　芝青松寺にて　星屋光次

青松寺萬年山の額みればちとせの松や十たび植ゑけん

本庄押上村普賢にまうでて

舟も象となりて川より此寺へおし上村のふげんなるかも　内匠はしら

寄早稲釋教

一つかみ早稲のみいれを手の内へ佛のくどくするす引なり　良村安世

寄虱釋教

世をいとふ身にもしらみはすみ染の衣のたまご珠數つなぎなり　朱樂漢江

如是本末究竟等

なく聲をぬえとはきけど尾を見てはしりかかしらかいかでわくべき

# 徳和歌後萬載集　巻第十五

## 神祇歌

賀　茂　　星屋光次

下上の賀茂はいづれかみおやぞと禰宜にたづねて糺べらなり

祇園會　　藤満丸

祇園會のみこしもひかる玉鉾の道しある代の祭するとき

祇園會のあくる日に　　星屋光次

けふは又はきだめ山に蒲鉾のわけをすてたる祇園會の跡

江戸芝浦に鹿島の社海をむかひてたてるあり海上をまもらんとの事ゆゑなりと聞きて　　濱邊黑人

海を守る神をいさめのひとをどりかしま浦にはなんなかりける



人丸社法樂に春のうた一日百首よみて奉りける　　權宗匠梅堂

はじめに

この神のぬさにもとらん筆つばなほうけぬさきにいざかきのもと

みそかに思ふ事の侍りければある神のみまへに

鈴をふりてせちにいのり侍るとて　　身輕折輔 北尾政演

千早ぶる神のみすゞにすがりてもなるとならぬは音にきかまし

江戸高田寶泉寺の庭にあらたにふじの形をつくりて淺間の宮をあがめ侍りければ　　紀有安

出來たてのふじのおほこは水無月のすばしり口にまゐりてぞしる

むさしの國桶川の宿にいとふりたる社ありこの頃たれいふとなく人まうでくる事おほしと聞きて　　二歩只取

此神に心のたけのちかひをばたがかけそめし桶川の里　くれ竹世艶

小兒の宮まゐりの日に

もとよりもちりにまじはる神ぢやとてあくたれものとなさせ給ふな　なます盛方

笠森稲荷團子

たくさんにつむかはらけの團子をばかさもりとこそいふべかりけれ　梅下武士

津の國すみよしの社にまうで侍りて松をみ侍りて

そのむかしきねがみうへの神の松たち臼ほどになりにけるかな　四方赤良

かものあふひのはを地紙の中にすきいれたる扇に

このかみのわけいかづちぞありがたきあふひでも猶あふぎてもなほ　津良河原

社頭踊

ひとをどりうたの音頭をとり居前手をしめなはのよれつもつれつ　奴ら藏人

寄花神祇

朝な夕な櫻のちりにまじはりて掃除しながら花をみやつこ　古瀬勝雄

寄玉瓜神祇

瑞籬にはふや熊野のからす瓜神のみまへの鈴なりにして　小造千萬里

寄僧神祇

いたどきにかみとどまらせ給へとやしばらくそらぬ僧の月代　高羽子雄鳥

寄飯焚神祇

ゆふだすきかけてはたらくめしたきがあしたの米をきよめ給へや　竹杖爲輕

寄傾城神祇

うかれ女がまことをみすのかみ心とけてあふみの客人の宮　奈間川野等人

寄夜發神祇

とこやみのよし簀の岩戸ひき明けて面しろくもいづる辻君　一節千杖

寄生醉神祇

かくかゝんのんではくらす生醉のつみてふつみもなかとみの友　濱邊黑人

寄蛸神祇

やつ藤の御紋に似ても瑞籬の内へはいれぬ蛸の入道　加保茶元成

寄刀神祇

やはらぐる光も年をふるがたなとけみやさびし赤いはし水　紀躬鹿

寄幟神祇

あたらしく染めしのぼりの椁鹿を神のみまへにふりたてゝ見る　雲樂齋

寄鍋神祇

つねはうそをつくまの人も正直のかうべにかぶる鍋の數々　巵米人

寄摺小木神祇

すり鉢の目にもろ〳〵のよごれをもこのすり小木にはらひ玉みそ　久壽根兼滿

寄紙屑神祇

はらひ給ひきよめて給ふさいはいにあまくだりますかみ屑のかご

用ありともはやく起くる事なかれひまありとも

みだりにうごくことなかれ金は戀の山にすて玉

は酒のふちになぐべし

おのれやれ富貴になさで置くべきか貧乏神の勅をそむかば

これは貧くうの神人にかゝりてつげ給ひしことば

ならびに御歌となん

石清水の放生會の事を人のかたるを聞き侍りて　梁仲墨

いはし水みてきた樣にはなし鳥數はしらねど八まんもあろ

世中百首歌の中に　荒木田守武

あまてらす神の教をそむかずば人の世の中富貴繁昌

千金のかはぎぬは一狐腋にあらず、萬載のことばは一編の集につくさず、こゝに四方赤良花鳥になれて月雪にあかず。されば雅筵としてむかへざるはなく、はた酒樓として醉はざるもなし。赤良さいつ比、はじめて萬載狂歌集を選ぶ。たま〳〵選者のことにあづかりしより、江戸四里四方のすきびと赤良がえらびに應ぜんとて、もてあつまれる草稿五くるまにあまり、かつ千箱にみてり。赤良ふたゝび一帙のしふをえらぶ。醉中往々狂詠にふけりて、老のまさにいたらんことをしらず。赤良はたしてとこわか後萬ざいしふとなつぐ。赤良がえらびをけみするに、後のえらびはほとんどさきの選よりもくはし。あゝ千金のかはぎぬは一狐腋にあらず、萬載のことばは一編の集につくさず、赤良がえらび萬載よりしてなほ百萬載にいたらば、作者はいよ〳〵たくみなるべく、選者はますますくはしからん。ときに天明四年うづきのはじめ、あけら漢江しるす。

德和歌萬載集終



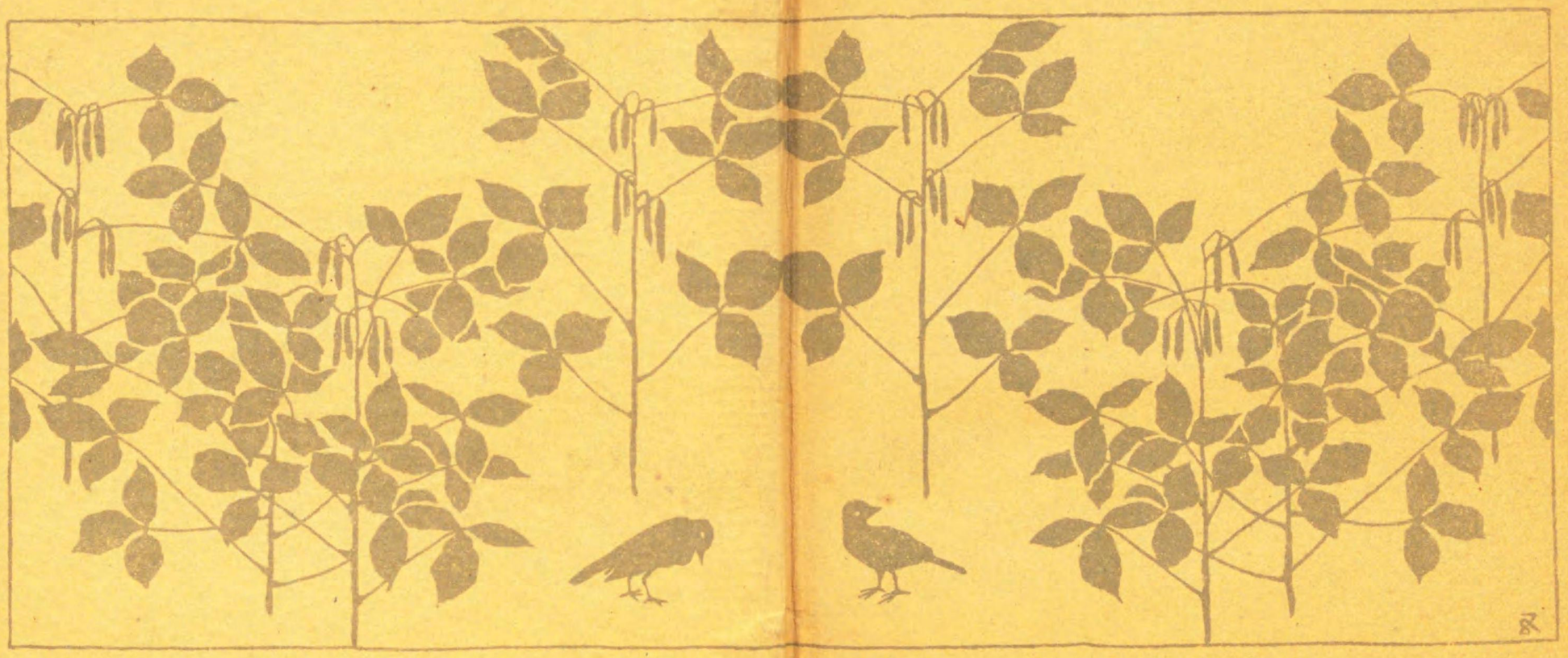
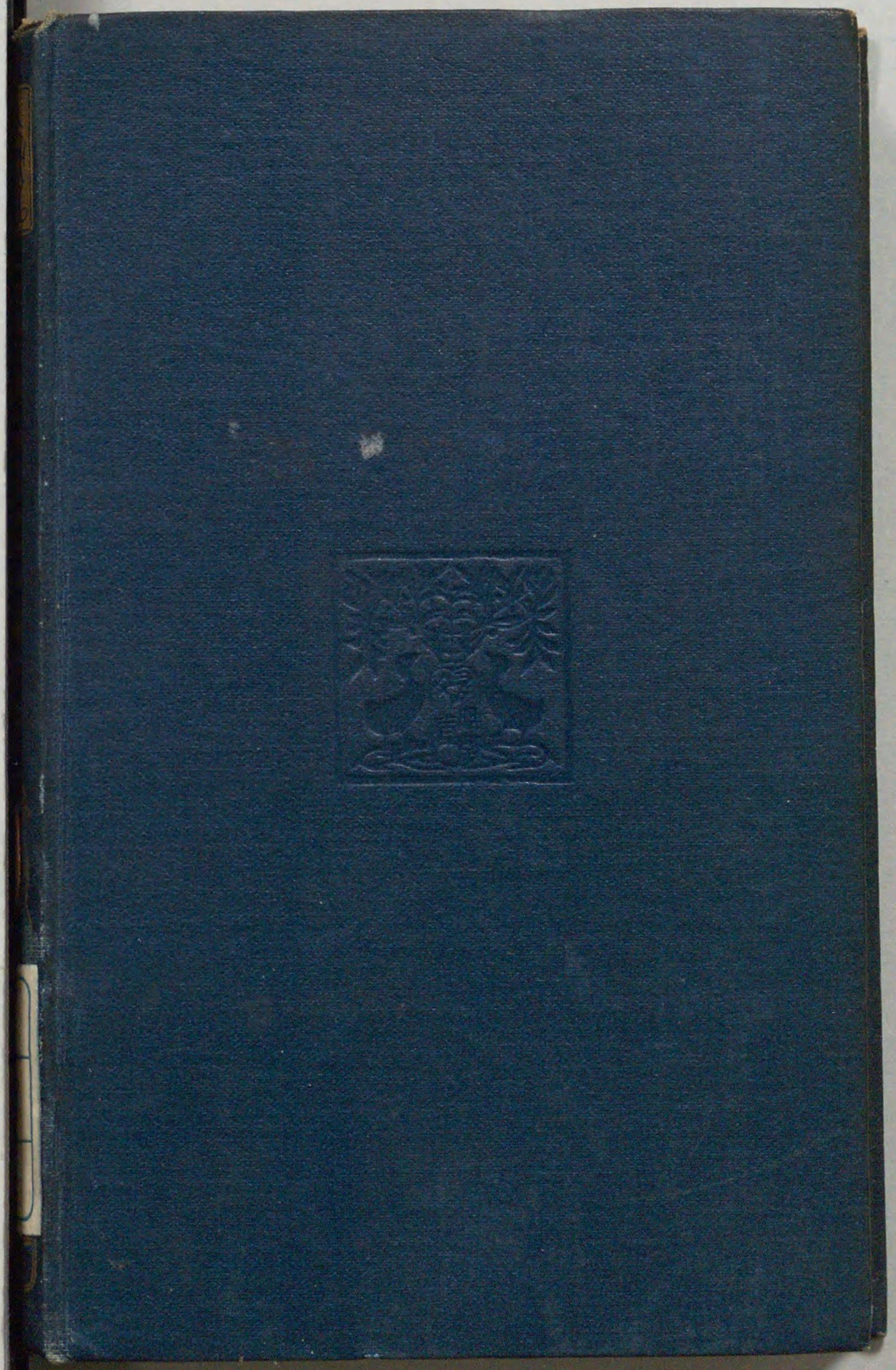
大正七年十一月十五日印刷
大正七年十一月十八日發行

有朋堂文庫
古今夷曲集
（非賣品）

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷兼發行者　三浦理

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　有朋堂印刷部

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

不許複製